
鬼の笑み一鶴

メフィストフェレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の笑み一鵞

【Nコード】

N3506W

【作者名】

メフィストフェレス

【あらすじ】

東京都心部に巨大な学園都市を構える『六鳳学園』そこに通う高等部二年の祠堂伽瑠羅は平穏を至って無気力に享受している男子生徒。

しかし、同じクラスに転校して来たミステリアスな美少女、鵞皇久音と出会ってから恐ろしくも血なまぐさい事件に巻き込まれて行く。だが、その果てに待っていたのは余りに平穏とは程遠い非日常な真実だった!?

主な登場人物（前書き）

初めて書かせて頂きますが、もう、好き勝手に書いて行きますので
ご容赦下さい。

主人公は若干、チートが入るかも知れませんが、これもご容赦下さい。

尚、話が続くに従って登場人物を更新して行く予定です。

主な登場人物

祠堂伽瑠羅（17歳）想像CV 小野大輔

主人公。とにかく全ての事に無気力な性格で学業成績も余り良くはない。唯一の特技は剣道で実家が道場と言う事もあり、相当な腕前。容姿は本人曰く中の上と言った所。大きな特徴はどこまでも真っ白な白髪。一人称は「俺」

鷓皇久音（17歳）想像CV 沢城みゆき

伽瑠羅のクラスに転校して来た女生徒で容姿は艶やかな黒髪に深い碧眼、透き通る真っ白な肌と言う美少女。容姿端麗、頭脳明晰な上に社交性もそれなりに備えているが故に瞬く間に全校生徒の注目の的となる。

かなり、ミステリアスな雰囲気を持った少女で前述した様に社交性は持ちつつも他人とはどこか一線を布いている節がある。一人称は「僕」

間宮稟星（38）想像CV 辻谷耕史

世界史の教師で伽瑠羅のクラスの担任。容姿は四十代近くでありながら二十代前半と言って差し支えはない優男。

その容姿に反映される通りの温厚な性格で落ち着いた大人の男で他の教師や生徒からの評判はかなり、良い。

伽瑠羅とは昔からの馴染みでもあり、彼の相談役に回る事も多々ある為、伽瑠羅の兄的な人物である。

鵜 想像CV 宮野真守

今の所は容姿性格共に一切不明の人物。物語が進むにつれ明らかになって行く予定。

北鳳院雅臣（18）想像CV 坪井智浩

六鳳学園高等部三年、生徒会長を務めている。聡明且つ伶俐な美青年で希有なカリスマ性を持つ人物。

常に冷静沈着で滅多な事で感情を露わにする事はないが、綿密な計算を崩される事を嫌い、その際には激情家な面を見せる事も・・・旧華族の家柄で在り日本有数の財団でもある北鳳院家の子息で剣道や弓道の有段者でもある。

鳳乃宮敦平（18）想像CV 遊佐浩二

六鳳学園高等部三年、茶道の家元、鳳乃宮家の跡取り息子で若くして宗匠と言われるほどの腕前。

しかし、本人は茶道とは無縁としか思えない程、荒々しくも猛々しい性格で喧嘩っ早いと同時にサディスティックな性癖を持つ。

容姿は雅臣とは対照的だが、競り合う程の美形で家元の息子でありながら、髪を金髪に染め上げている。

栖鳳院昶子（18）想像CV 石津彩

六鳳学園高等部三年、生徒会書記。

栖鳳院グループの社長令嬢でかなりのお嬢様なのだが、本人はボーイッシュでサバサバした性格。だが、絞める時は絞める性分である。因みに上記の敦平とは犬猿の仲である。

柔術と合気道の心得がある。

概要「二期一会」

東京の都心部に都市その物が敷地というところでもなく、大きな学園がある。名を「六鳳学園」と言う。

これだけの規模の学園だから、当然寮もあるけれど、学園都市の自宅から通う者が大半だ。因みに俺は前者。何故かと言うと俺の自宅はかなり厳格な剣道場で家にいるより学園の方が安らげると言うのが理由だ。

それはそうと自己紹介がまだだったけ？面倒臭いなあ・・・

まあ、俺の名前は祠堂伽瑠羅^{しどうからら}。傍目から見てかなり、厳しい名前だろう・・・俺もそう思う。

まあ、容姿は中の上って所だな。少なくとも、大して異性からモテると言う程の容姿ではない。ただ、際立った特徴と言えば、この真っ白な髪くらいだろう・・・ある事情で髪が一気に老けてしまったのだ。まあ、その事情を深く語るつもりはない・・・面倒臭いからな。学業成績は・・・最悪だ。数学の数式なんて見ただけで眠気が走り、現代文だって形容詞だなんて訳が分からない。化学は論外・・・世界史は・・・あんだだけの年表だの出来事だのいちいち、覚えられるかよ。はつきり言って正気の沙汰じゃない。

一つくらい取り得はないのかって？それくらいなら俺にだってある・・・剣道・・・道場の息子なんてものに生れて来た不運か小さいころからスパルタ方式で叩きこまれたからな・・・嫌でも特技になりもする。

早朝の九時、俺は今、屋上と言うベタな場所でサボリの最中だ。何しろ一科目は嫌いな科目の筆頭格である数学・・・最低だ。

まあ、二科目で顔を出すのが無難だろう。それまで俺は屋上で空でも見上げて過ごす事に決めた。

と、その時、ふと下の校庭がザワザワと騒がしくなった事に気付い

た。

俺は少し気になり下の校庭を見下ろすと――

息を呑んだ。

校庭を一人の少女が悠然と歩いているのが見えた。

艶やかな黒髪、透き通る程に白い肌・・・それから深い碧眼・・・
ゾツとする位の美貌を備えた少女がそこに居た。

あの眼・・・西洋系の血が入っているんだろうか？

俺はその時、そんなどうでもいい事を考えながら、少女を見ていた。
確かにとても、綺麗な子だと思いはしたが、どうせ自分には縁がな
い事だと思っていたからだ。

ところが、俺はこれから先、彼女――鵠皇久音むおうくおんと深い縁を結ぶ事にな
るのだが、その時は・・・無論、知る由はない。

そして、これは俺が知る由もない話なのだが、この邂逅の直ぐ後に
こんな遣り取りが校長室で行われていた。

「よく来てくれた、鵠皇君」

壮年の男性――校長が久音を校長室に出迎えて応対していた。久音は
その美貌を微動だにせずその応対を受け止めていた。

「計画は順調だ。これまでの研究も漸く実を結び始めた。」

「そこへ君が来てくれたからには計画はさらなるステップへと歩み
出すだろう」

校長が嬉々とした顔でそう言うのと久音はとても優雅な微笑を浮かべ
て言った。

「ええ、勿論です。僕はその為にここへ来ました」

俺が無気力ながらも享受して来た平穏は・・・今日この日から徐々
に・・・

だが、確実に終わりを告げ、歪な渦中へと俺を誘って行くのだった。

ああ、本当に面倒臭いよな・・・・・・・・・・・・・・・・

始めの事「天衣無縫」

一間目の終わりを告げるチャイムが鳴った時、俺は教室に戻った。因みに二間目は世界史だ。稟星さんの科目か・・・稟星さんは嫌いじゃないけど、世界史までは好きになれない。だって、昔の出来事なんて俺、知らねえし・・・けど、流石に二間目あたりからは行かねえとな・・・

そんな憂鬱な気分で俺は教室に戻った。すると、ある一箇所にクラスの間中が大勢集まっているのが目に入った。

俺は何事かとは気なくその集まりの中心を覗いた・・・そこには今朝、校庭で人目を惹いていた少女がいた。

俺はそれでこの集まりを半ば、納得した。

（成程・・・ウチのクラスに転入して来たのか。それならこの集まりも頷ける。実際、相当な美人だし納得な）

集団の中で女生徒が彼女に質問して来た。

「鵜皇さんは前はどこに住んでいたの？」

鵜皇って言うのか・・・何っーか、厳つそうな名字だな・・・まあ、俺も人の事は言えんが・・・

「ロンドンに住んでいた。父の仕事が商社と言う事もあって母の実家で十年ほどはそこで育った」

やっぱり、外国系の血が流れていたのか。まあ、あの青い眼は日本人にはとても、在り得ないもんな。そんな事を俺がぼんやりと考え

ていると、一人の男子生徒が続けて鵲皇に質問した。

「じゃああ、なんでこの学校に転入して来た訳？」

それは俺も思った。何で、態々住みなれた土地を離れてこんな極東の島国の学校に編入して来たんだか？そりゃ確かにこの六鳳学園は名門校と呼ぶに相応しいマンモス校だ。

何しろ、都市一つが学校その物なんて言う在り得ない規模の学園だからな。その上、進学率も極めて高いから、ここを狙う受験生も決して少なくない。

だが、名門校と言うならイギリスにだってパブリック・スクールだのと言った名門校なんていくらでもある筈なのに・・・何故？

そう俺が不思議に思った時、鵲皇は滑らかな声で問いに答えた。

「『匣』を開ける為だよ」

は？

その答えに俺とクラスの連中は間の抜けた声を出した。意味が分からん。これが俺達共有の第一感想だろう。

彼女の言葉を真に受けるとするなら、彼女はその『匣』とやらを開ける為に彼女は態々遠い異国に転校して来たという事だが、そもそも、その『匣』は一体何の匣なのだろう？

クラスの連中がそう質問をしようとした時、教室にダブルのスーツを着込んだ優男風の男性が入って来た。男性は静かに教壇まで上がり、他を安心させる様な柔和な笑みと声で生徒に告げた。

「早速、転校生と打ち解けているのは良い事だけど、もう授業の時

間だよ。皆、席に着いて」

すると、鷗皇の周りに集まっていたクラスの連中はすぐに自分達の席へと戻って行った。相も変わらず、流石だなこの人は・・・

この人こそ俺達のクラスの担任で二間目の世界史を担当する間宮稟星先生だ。因みに俺の昔馴染みで兄貴分ですらある。

俺の親父の大学時代の後輩に当たる為、彼自身も結構な歳であるはずなのだが・・・全然、そうは見えない。今でも二十代前半で難無く通る容姿だ。

先程の様に柔和な物腰で何故かこの人に逆らってはいけないと思わせる雰囲気醸し出す物だから、男女問わず多くの生徒から好かれているし、他の教師達からの信頼も厚い。

実際、俺も何だかんだ言っても、この人には頭が上がらない・・・故に世界史の授業だけは一度もサボった試しはない。まあ、成績は勿論、別の話だが・・・

などと俺が考えていると、稟星さんは俺に矛先を向けて来た。

「祠堂伽瑠羅君、君HRの時に居なかったよね。二間目からの登校とは随分のんびりしてるねえ」

すると、周りの連中から笑いが木霊した。俺はかなり、バツが悪い顔になる。

まったく・・・この人はさっきも決して怒ってる様な口調じゃなかったけど、あの笑顔で鋭いところ突くんだもん・・・怒鳴るよりもよっぽど、性質が悪いや・・・

「それはそうと、祠堂君には転校生の紹介がまだだったね。鷗皇さん、悪いけどもう一度、自己紹介してくれるかな」

鵠皇は静かに頷き、立ち上がると俺の方を見て口を開いた。

「鵠皇久音だ。よろしく、祠堂伽瑠羅君」

久音・・・久しい音。どう書くかも分からないのに何故かは分からないが、この時、俺はそう思った。敢えて、その理由を挙げるとするなら、俺にはその声自体がまるで、久しく聞いた音に聞こえた気がしたからだった。

とにかく、これが俺と鵠皇久音の本当の意味でのファースト・コンタクトだった。

と言っても、これは本当にほんの序章に過ぎなかったんだ。まるで、『天衣無縫』を地で行く様な彼女との非日常は・・・

「祠堂君、返事は？」

稟星さんに促され、白昼夢から帰って来た俺は彼女に最初の声をかけた。それが彼女との永い縁の皮切りになる事も知らずに・・・

「あ・・・ああ、よろしく」

始めの事「天衣無縫」(後書き)

取り敢えず、第一話はこれで終了です。次の話は順次掲載してまいりますので心してお待ち下さい。

二つ目の事「焦熱地獄」

鵠皇久音が転校して来てから二週間ほどが経った。

その時点で俺の彼女への第一印象は『完璧』の一言だった。

抜群の容姿やプロポーションは元より、その頭脳は明晰だった。教師からの問いには一から十まで全て即答したし、運動神経だって抜群で男子顔負けの身体能力だ。

それに、かなり社交性も備えている故か人付き合いもそれなりに悪くはない・・・が、それはどこか周囲とは一線を布いた様な交際の仕方ではあった。

しかし、それでもそれが返って他の生徒には新鮮且つクールに見えるのか逆に憧れると言う生徒達が大半だった。

「あつと言う間に人気者になっちゃったねえ・・・鵠皇さん」

そう俺に耳打ちして来るのは俺の唯一の友人と言っている東庸輔。

容姿はかなり細身で童顔だ。趣味は人力飛行機の製作と飛行だ。

尤も、子供の頃、一緒に乗せて貰った時はかなり酷い目に合った・・・

・飛行機がそのまま、湖に墜落し溺れかけたのだ。

あの時は親にもシコタマ怒られて散々だったな・・・

などと思いつつ、俺は庸輔の耳打ちを肯定した。

「ああ、まあ、あれだけ整ってりゃな」

「だよね・・・」

と、庸輔も物欲しそうな眼で鵠皇を見た。

「お前、ああ言うのが好みだったわけ？」

俺は少しからかう様に庸輔に問うと庸輔は慌てて否定した。

「べ、ベベツ別にそんなんじゃないよッ！」

「まあ、別にお前の勝手さ。因みに俺はパス」

「ど・・・どうして？」

思わず庸輔が問い返す。こいつ、本当に分かり易いよな・・・などと冗談半分で思いながらも俺は答えた。

「どうしても何もないさ・・・あんまり、高望みが過ぎると身の破滅って親父や祖父ちゃんに耳にタコが出来る程、言い聞かせられるからな。じゃあ、俺は次サボるわ」

俺はそう言って、半ば俯いている庸輔を残して教室を後にした。

庸輔・・・悪いけど、お前じゃ彼女は荷が勝ち過ぎるよ・・・

別にこれは意地悪で言っている訳ではない。本当の事だ・・・俺はこれでも武道を嗜むから分かる事なのだが、彼女・・・鷗皇からは途轍もないオーラを感じた気がした。

例えるなら、そう・・・人が途轍もなく強大な物に遭遇した感じに似ている。こう言ったら陳腐な表現だが、とにかく、それが彼女に感じた俺の第一印象だ。

それはさて置き、俺はどこでサボろうかと思案した。毎回、同じ場所ですぼるのはリスクが高い。あつと言う間にマークされる可能性が大だ。

よし、保健室に行こう。俺は即決した。

保健室なら気分が悪くてとでも言えば一時間はゆうにベッドで眠れるだろう。我ながら良い案だ。

俺は早速、保健室に向かい妙案を実行に移した。

「すみません・・・少し、頭が痛くて・・・」

我ながら白々しい程、お決まりのセリフを言う俺・・・校医はと言うと・・・

「ああ、そうか。なら、ベッドで横にでもなってなさい。私は少し用事があるから」

俺はニヤリとした。計算通り・・・この校医はかなり、大雑把な人

で大した理由を突っ込んでくる事も無いので保健室はサボるには格好の場なのだった。

俺は一応、重そうに見える足取りでベッドに向かうと突如、校医が口を開いた。

「ああ、ちよと君」

「は・・・はい、何でしょうか？」

俺は内心、ギクツとしながらも校医の方を苦しそうな顔を装って言った。

もしかして、勘付かれたのか？

「隣のベッドにもう一人寝ているから静かにね」

「あ、は・・・はい」

俺は心の中でホッと息を付きながら答えた。

校医はそのまま、保健室を後にした。

もう一人寝ているのが居るとは計算外だったが、上手く言った・・・さあ、俺も一眠りするとしよう。

そう俺がベッドへ横になろうとした時・・・

「やあ、漸く直接、話せるね」

その滑る様に涼やかな声に俺の身体は一気に強張った。

そして、ぎこちない動きで首だけを白のカーテンに仕切られたもう一つのベッドに向ける。

すると、カーテンが開きそこから鵠皇久音の艶やかな黒髪と吸い込むような碧眼が俺を見つめていた。

総毛立つ・・・とはこの事を言うんだろうか・・・まるで、身体が・・・眼が・・・金縛りに合ったかのように彼女から眼を逸らせない。それでも、俺は剣道の有段者だし、滅多な相手に気後れする事はな

い。なのに！何故、線が細い女性でしかない彼女からこんなにも畏怖と言う感情を抱くのはどう言う訳だ！？

「そんなに怖がらないでくれないか、伽瑠羅。僕はただ、君と話をしたいだけなんだ」

「もう、呼び捨てかよ・・・」

俺はせめてもの抵抗として強めの口調で言うと鵲皇は相も変わらず、涼やかな声で言った。

「僕が転校して来てから二週間ほども立つし、学友を姓名で呼ぶのはしつくり来ない。良かったら、君も僕を久音と呼んでくれたまえ」

俺は一気に溜息を付いた、諦めたと言い換えてもいいかも知れない。俺は鵲皇・・・いや、久音の顔を睨むように見て言った。

「俺と話したいって・・・どうして？」

「どうしても何も、君は授業を良くサボるし、何より他人とは大して関わらうとしないだろう。だから、気になってしまっただけ」

その言葉に俺は少し、ムツとした。それを言うならあんただって・・・ッ！

「それはあんただって同じだろう・・・あんたも必要最低限な付き合い方しかしてないだろうが。常に皆とは一線を布いているよな」すると、久音は・・・

「確かに否定はしないが、そんな事は誰にでも当て嵌まる事だ。誰だって人に知られたくない事や踏み込んで欲しくない一線と言う物はあるだろう」

そう返されると反論の余地はない・・・もっともだ・・・さらに彼女は追い討ちをかける。

「だが、君の場合はその線を多分に引き過ぎだな。君は学業もそうだが、誰とも真剣に向き合っていない」

最も鋭い所を彼女は突いて来た・・・

そうだ・・・俺は勉強もそうだが、他人とも必要以上には向き合おうとは思わなかったし、向き合う努力もなかった。唯一の特技と自負している剣道だってそうだ。

俺は別に剣道が好きだった訳でも、自分からやろうとした訳でもない。ただ、家が道場だから・・・跡取りだからと生まれた時から竹刀を握らせられただけだ・・・

それでも、俺にはしたい事なんて今も昔もなかったし、ただ、与えられる課題にのみ、のめり込み技や技術の研鑽を積んだ。

その結果、俺自身にも才覚があつてか十三になる頃には俺を打ち倒せるものは大人の中にすら全く、居なくなった・・・

だが、親父はそれでは満足しなかった。

『伽瑠羅・・・お前は確かに強くなった・・・才だけでなく力も技も備えた。この俺も純粹な技量では最早、お前の足元にも及ぶまい・・・だが、お前の剣には他者所かお前自身がない。つまり、空っぽなのだ・・・芯のない剣は脆い。このままではお前は己の才と技量にのみ踊らされる愚者となるだろう』

そう・・・親父にも指摘された事を彼女は見透かしていた。俺は無意識に拳を爪が喰い込む程に握り締めた。

「と言っても、君に話したかった事はそれではない」

その言葉に俺は久音の眼を見た。

では、何を話したかったと言うのか？

「単刀直入に言おう。君には『計画』に参加して欲しいのだ」

「『計画』？」

俺が呆れる様な声を出すと久音は極めて真顔で言った。

「そう．．．匣を開ける為の．．．ね」

「そうだ、転校初日に言ってた。その『匣』って言うのは何の匣なんだ？　そして、こうも言ってたよな。あんたはそれを開ける為にここに転入して来たって・・それはどう言う意味だ？」

「それは・・・」

[illegible]

久音が答えようとしたその時、けたたましい悲鳴が校内に響き合つた。

「何だッ！？今の！」

すると、久音はすぐさま、保健室を飛び出した。

「お・おいっ！ちよつと、待てよっ！」

俺も思わず彼女の後を追いかけた。

俺はこの凄惨な光景を見ても未だに実感が湧かなかった・・・余りにも唐突過ぎて・・・理性が事実を認識しても感情がついて行かない・・・

そして、俺はふと久音の方を見たが、ゾツとした。

彼女は笑っていたのだ。クラスの連中と談笑してた時と、俺に挨拶をした時と同じ優雅な微笑を・・・浮かべていたのだ。

今日、この日・・・俺の平穏が唐突に終わりを告げた。
そして、始まったんだ・・・

魔窟の日常が。

三つ目の事「鬼の理」（前書き）

さて、とうとう前話で伽瑠羅の日常は崩壊へと至りました。
ここから・・・かなり、グロテスクな展開となって行きますが、このまま突っ切らせて貰います。

三つ目の事「鬼の理」

校医の焼死事件から三時間後・・・
校長室

「そうか・・・平野校医は失敗したか」

校長は冷淡とも言える声で問い質した。

「ええ、どうやら彼は『器』ではなかったようです」

久音も苦笑する様に答え、三時間前にあんな事があったばかりにも拘らず悠然とした態度で紅茶を口に運んだ。

「理論は既に完成されている。だが、問題はやはり・・・適性のある検体・・・か？」

校長の眼が何時にない程、鋭い光を放つ。久音はいつもの優雅な笑みで持ってそれを受け止め口を開く。

「それについては校長・・・僕に心当たりがあります―」

俺はいつの間にか、荒れた荒野の真っ只中に居た。周りには人もいない花所か草すらもない。石すらもない・・・おまけに空はどんよりとして暗い。夜では少なくともない・・・どこか澱んだ空だった。

全てが滅び去った世界・・・俺はそんな空間の真ん中に立っていた。

「な・・・何だよ・・・ここは？」

俺は呻く様な声を出して後ずさった。すると、後ろから声をかけられた。

「ここは全ての果てだ・・・」

その声に俺は反射的に振り返った。そこには黒いローブを頭まで羽織った男が居た。だが、俺はその不審な姿よりもローブからはみ出している獣の様な手に眼がいった。

俺はゴクリと生唾を飲み込む・・・

「ここは全てを終わらせたいと望む者達が来る場所・・・汝もその一人」

「俺・・・が？」

「違うと申すか？全ての事に、他者に・・・いや、自身にすら無気力で無関心だった汝が？」

その言葉に俺は再び、一振りの剣で斬られた気がした。

瞬く間に親父や久音の言葉が脳裏を過ぎる・・・

『君は学業もそうだが、誰とも真剣に向き合ってはいない』

『お前の剣には他者所かお前自身がない。つまり、空っぽなのだ』

二人が放った言葉が再び俺を抉った様な錯覚さえした。

「返す言葉もない・・・そう言う顔だな」

男は俺の蒼白になっている顔を見て見透かした様に言った。

俺は思わずキッと男を睨み付けた。それを見た男はフンと鼻で笑い言った。

「睨み返す気力くらいはあるか・・・だが、改めて忠告しておくぞ。己を持たぬ汝には他者は愚か己すら護る事は能わぬ」

「護るって・・・何から？」

俺が問うと男は答えた。

「鬼だ」

その時、俺は何故か久音の事を頭に浮かべた。

一人が眼の前で苦悶しながら焼け死んだにも拘らず平然として居る所か、笑みすら浮かべた彼女・・・俺の中に一つの疑念が生まれた。

混乱の中にある俺を前にして男は背を向けた。

「ま・・・待てッ！」

俺が叫ぶと男は冷淡に言った。

「己すら分からぬたわけに時間を割くつもりはない」

何を勝手な事を・・・勝手にお前が俺の前に現れて意味不明な問答をけし掛けたんだろうがッ！？

「名前くらい名乗れ！それが礼儀だろうがッ！」

すると、男は一度、振り返って言った。

「然り・・・我は」

そこで眼が覚めた。気づいた時には俺は寮にある自分の部屋にあるベッドで横になっていた。そして、傍にある電子時計を見ると深夜の二時だった。

俺はベッドから起き上がり髪をクシャクシャと掻き毟った。

「ちっ・・・きしょー、夢かよ」

まったく、我ながら病んでいるな・・・昼間、あんな光景を見たものだから、神経質になってんだな。

俺は冷蔵庫からペットボトルを取り出し水を飲んだ。

忘れる・・・あんな事はそう何度もある訳がない。忘れる・・・忘れるんだ・・・ッ！

翌朝、再び目覚めた俺は何事もない風を装って登校した。教室に入ってからと庸輔が駆け付けて来た。

「伽瑠羅、大丈夫？昨日は何か鵲皇さんと一緒に大変だったようだけれど・・・」

そう庸輔の言う通り、昨日は大変だった。何しろ、一人が焼死した現場を第一に目撃したのだ。先生達への事情説明次いで警察からの事情聴取等々・・・

それだけだったら、まだ、よかったが・・・両親から散々電話がかかって俺が無事かとか、怪我はないかとかしつこく聞いて来たのだ・・・正直、オーバーだよな。

「大丈夫だよ・・・俺が怪我とかした訳じゃなし・・・てっ言うか・・・」

俺はそこでクラス中・・・特に男子連中から鋭い視線を浴びせられている事に気付いた。

「おい、男子連中から痛すぎる視線を感じるんだが？」

庸輔に耳打ちで聞くと庸輔は囁く様な声で事情を説明した。

「ほら、昨日の事件を最初に目撃したのが伽瑠羅と鵠皇さんだったでしょ？それが元で伽瑠羅が鵠皇さんと一緒に保健室でサボっていた事が知れ渡っちゃっているんだよ」

「成程・・・それでこの敵意と言う訳か」

理由を知った俺は嘆息を付いた。

大方、俺が久音を無理矢理、何とかしたとかある事ない事想像して噂しているのだろう・・・

たくっ、こっちの気も知らないでいい気なもんだ・・・

俺は若干、苛立ちを感じながら、席に着いた・・・と丁度その時、もう一人の渦中の人物が教室へと入って来た。

「やあ、皆おはよう」

いつもの優雅な微笑みを皆に向けて挨拶して入って来た久音に対し俺は呆れと怒りが混じった様な視線を向けた。

何が『皆、おはよう』だよッ。誰の所為でこんな事態になってると思っっている。

すると、クラスメイト達が一斉に久音の方へ走りだし質問を連発した。

「鵠皇さんッ！昨日、大丈夫だったッ!？」

「なあ、昨日は保健室で祠堂と二人きりだったって本当かッ？」

「それであいつに如何にかされたとか言うのも本当ッ!？」

「俺は祠堂が鵲皇さんをたぶらかしてサボりに付き合わせたって聞いたぞッ!!」

おいッ！何がある事ない事でうち上げてやがる・・・ッ！俺は右拳を握り締める。そして、久音はと言うと何でもないと言う顔でこう答えた。

「ああ、それは誤解だよ、正確には僕が彼と話したくて自発的にサボったのだ」

おいしいッ！！火に油を注いでどうするッ！？すると、俺の懸念通りに周囲は一斉にざわつき出した。俺は呆けた様に天を仰いだ。

終わった・・・うん、もういつそ清々しい位に・・・

その時、救いの神は現れた。

「はい、皆席について。HRを始めるよ」

稟星さんが教室に入って皆を促すとさっきまで騒いでいたクラス連中は嘘の様に静寂となった。

稟星さん・・・今日は何時にも増して後光を感じるよ・・・俺は手を合わせて自らの救いの神に祈った。

「さて、皆ももう知っているだろうけど、昨日、校医の平野先生が亡くなられました。警察は他殺か事故両方の線で捜査していますが、真相はまだ、不明との事です」

稟星さんの言葉に俺は訝しんだ。

事故・・・あんな人が突然燃え上がるなんて事故があるかよ・・・どう考えたって可能性は前者だろう。

「何れにしても当学園としましてはこの事実を重く鑑み本日は休校とします」

稟星さん、校長、ナイスッ！

俺は内心で諸手を上げるが、次に続く言葉で一氣にどん底へ突き落とされる事になった。

「それから、もう一つ・・・昨日、校医の死を発見した二人の生徒、祠堂伽瑠羅君と鷗皇久音さんですが、二人は体調が悪いと偽って保健室でサボっていた所、平野先生の悲鳴を聞いて現場を発見するに至ったと言う事です」
はい？

「学園としては両名の行為を不謹慎と見なし本日は体育館の清掃を命じます」

ええええッ！！そんなあああッ！！

俺は脳内で悲鳴を木霊させた。

そんな俺の様子を稟星さんは飛び切りの笑顔で見つめて言った。

「以上です」

「稟星さんの鬼め・・・こんなだだ広い体育館を俺たち二人だけで掃除しろってのかよ」

俺はモップで体育館の広過ぎる床を掃除しながら、愚痴った。

「口を動かすよりもっと、手を動かしたらどうだね？少なくとも詰まらない愚痴を零すよりも建設的だと僕は思うよ」

一方、久音はテキパキと手を進め掃除を続けていた。

俺は何か言い返そうとしたが、止めた。何より彼女の言う事は正論だ。第一、今、言いたい事は、聞きたい事はそんな事では元よりない。

「なあ、昨日の聞きそびれたけど・・・あんたが言う『計画』って何なんだ？」

「唐突だね。てっきり、僕は昨日言った事など君は大して気にも留めていないと思っていたよ」

「はぐらかすなよ、余計に気になる。それに、昨日のアレ・・・平野先生が焼け死んだ事もその『計画』とやらに關係しているのか？」

すると、久音は不思議そうに聞き返した。

「何故、そう思う？」

「何故って言われても・・・昨日からずっと漫画の様な展開ばかりだからな。そして、漫画だと大抵ああ言う出来事には関連性があるものだろう」

すると、久音は吹き出した様に笑い出した。余りに笑うものだから、俺はだんだん、自分が恥ずかしくなって赤面し出した。

「な・・・何かおかしいか？」

「いや、すまない。ただ・・・伽瑠羅、君は本当に面白い奴だな。フフフ」

久音は暫くそうやって笑っていたが、やがてそれも止まり俺の問いに答えた。

「そうだね・・・確かに平野校医の死は一つの要素だとは答えておこう・・・」

一つの要素？根っこにある問題はそれよりも深いって事だろうか・

・
久音はさらに語った。

「そして、昨日君に告げた『計画』だが、簡単に要約すると『人』
と言う名の『進化の匣』を開け世界を変革すると言う物だ」

はっ？世界ッ！？

な・・・何だか話が一気に壮大になってないか？

「せ・・・世界を変革って・・・何の為に？」

すると、久音は今まで見た事がないほど悲しげな表情を見せた。

俺は思わず少し、ギョツとする。

「解き明かす為だよ・・・」

「何・・・を？」

俺がたどたとしく問うと逡巡していた彼女は先を続けた。

「僕達・・・『鬼の理』を」

俺の心臓は早鐘を打ち始めた。昨晚の夢で言った男の言葉が甦る・
・

『鬼だ』

俺が何かを彼女に何かを言おうとした時、突如として背中に悪寒を感じ瞬時に持っていたモップの柄を刀代わりにして後ろ向き様に居合いを背後に迫る者に放った。手応えは僅かにあったが、相手も察したのか、まともに食らう前に俺の背後から飛び下がった後だった。

「誰だっ！」

俺の問いに刺客は瞬く間に姿を現した・・・が、俺はその姿に度肝を抜いた。

何しろ、そいつは両腕にコウモリのような翼が張り付き鷹のような鋭い爪を十本の指に生やしていたからだ・・・

「ふん、避けたか・・・噂程、腑抜けでもなさそうだ。」
刺客は己の爪を舌なめずりして言う。

何だよ・・・こいつはッ！？人体発火の次はミュータントかよッ！もう、何もかも滅茶苦茶だっ！

「だが、その様な獲物で俺の爪と翼が圧し折れるかな？」

俺はその言葉に刀代わりにしたモップの柄を見た。すると、大きな亀裂が入っている。

次、あんな物を受け止めたら間違いなく折れるな・・・

俺は冷静に今の状況を把握し、刺客の方を見た。

「ふっ、どちらにしろそのオモチャは次で持たん様だな・・・所詮、お前の『器』などはここまでと言う事を暗に示しているのだろうよ。さて、最早問答は無用だな・・・では死ぬがいい。そして、『皇の焰』は俺が貰い受けるッ！」

刺客は翼を広げ、一気に俺目掛けて襲い掛かって来た・・・

本当にもう・・・滅茶苦茶だ。進化だの・・・世界の変革だの・・・
どんだん、話が壮大になって来た挙句に化け物の刺客と来た・・・
おまけに『皇の焰』って何だよ？もう、訳分かんねえったらねえよ・・・

ただ、この時になって初めて俺は自覚し理解し確信したんだ。今まで俺が無気力に無関心に享受して来た『平穏』は永遠に失われたのだと言う事に・・・

んでもって、この先ずっと、面倒臭い事が続いて行くって事もなッ！

三つ目の事「鬼の理」（後書き）

もう、一気にバトル・モードへ突入です！

しかし、最初はホラー・アクションにするつもりがいきなり、ダイク・ファンタジーぽくなりました・・・まあ、いいです。作者足る私がGOサインを出しているんですから。

何はともあれ、物語はいよいよ本格始動です！

世界を変革させる『計画』の全貌とは？久音の言った『鬼の理』とは？そして、『皇の焰』とは？

次話期待ですッ！

四つ目の事「皇の焰」(前書き)

久音から『計画』の一端を聞き、その直後に異形の刺客の襲撃を受けた伽瑠羅。

その運命や如何に!?

四つ目の事「皇の焰」

「はははははッ！『皇の焰』は俺が貰い受けたアアッ！！」

刺客は翼を広げ、俺目掛けて突っ込んで来る。

俺は咄嗟に左腕で久音を抱き抱え、刺客の特攻をかわした。そして、刺客は交わした後ろに合ったのはバスケットのゴールポストに己の翼をぶつけ・・・いや、斬ったッ！

そう、刺客の翼はまるで、鋭利な刃物の様にゴールポストを真っ二つに斬り落としてしまったのだ・・・斬られたゴールポストは床に激突し物凄い音を立てる。

「ふん・・・今度は獲物を交える事無くかわしたか・・・まあ、それしかあるまい」

刺客はゴールポストがあった箇所に止まり俺達を見下ろして言った。
「見たか・・・この通り、俺の翼は刀よりも研ぎ澄まされた刃その物よ。さらには飛行速度が加われれば鋼鉄をも斬り裂く最強の剣にさえなるのだッ！！」

そう言って、刺客は再び俺達目掛けて飛んで来る。それもさつきとは比べ物にならない速度で・・・ッ！

俺は動体視力を限界まで酷使してそれを避けた・・・が、俺の右肩がパツクリと割れ血が噴き出した。

「伽瑠羅ッ！」

抱きかかえられた久音が叫ぶ。俺は右肩を走る激痛に歯を食い縛りながらも、しっかりと久音を離さぬ様に左腕に力を込める。

「単なるかすり傷だ・・・」

すると、刺客はせせら笑った。

「ハッ！強がりには止せ、致命傷とはいかずとも肉が抉られたのだ。当分、右肩は使い物になるまい。しかし、俺はさっきにしても、最初の一撃にしても殺すつもりで放った・・・にも拘らずお前はそのオモチャと右肩だけで済んだ・・・常人ならばとつくに冥途行きだ・・・大した遣い手だよ、お前は」

「お誉めに与り光栄の至りと言っとくよ・・・」

俺は余裕を見せて見たが、状況はハッキリ言って芳しくない・・・寧ろ、こっちの分はかなり・・・悪い。

しかし、なんて剣圧だ。あれをまともに食らったらず、死ぬな・・・おまけに下手したらこの体育館がこいつ一人の為に倒壊しそうだ。そうなったら、俺達は生き埋めか？冗談じゃないッ！

俺は少しでも時間稼ぎをする為、刺客に質問を投げ掛けた。

「おい、なんで俺を狙う？少なくとも、俺は他人から恨みを買う様な事はした覚えはないぞ」

「知れた事・・・お前が『器』だからよ」

刺客はさも分かり切った事と言わんばかりの顔で答えた。

『器』？

「それなんだが、さっきから何を言ってるのか俺には皆目見当つかない。その『器』とか『皇の焰』とか・・・もう、さっぱりなんだよ」

すると、刺客は突如として笑い出した。それはもう、大爆笑だった。

「なっ・・・何がおかしいんだよッ！」

「ハハハハッ！これが笑わずにいられるかっ？お前が自分をまるで知らぬとはなあッ！ふあははははッ！！これは愉快！」

俺が自分をまるで知らないだって！？最近、どいつもこいつも、こんな問答ばかりを――！

俺は苛立ちを抑えきれず齒軋りした。

やがて、刺客は笑いが収まったのか話を続けた。

「まあ、いい・・冥途の土産くらいは確かに欲しかろう。『器』とは『皇の焰』を統べる者の事だ。」

「その答えじゃ全然、分からない・・まあ、分かる事があるとするば・・その『器』である俺が『皇の焰』ってやつを統べる事ができるか？」

「俺は認めてなどいないが、そう言う事だ」
刺客は不承不承と言う口調で答えた。

「じゃあ、もう二つ質問する。そもそも、その『皇の焰』って言うのは何だよ？そして、それも『計画』とやらに関係しているのか？」

「ふん、そこまで教えてやる程、俺はお人好しではない！」

おいッ！結局、教えずじまいかよッ！？

「それでも感謝して欲しいくらいだぞ？俺は元よりこの様な問答に付き合っただけの道理はなかった。それを些末な一端をお前如きに教えてやったのだからな・・さて、今度こそ問答はいらぬな？死ぬ。そして、安心するがいい・・『皇の焰』はこの俺が継承してやる。」

全てに無気力なお前に代わってなッ！」

刺客は再び翼を広げ攻撃態勢を取った。

俺もモップの柄を持って受けて立つ姿勢を取る。

本当に今日は厄日だな。こんなのに絡まれるなんて・・・にしても

「無気力」か？最近、聞いてて耳が痛い言葉ばかりだな。確かに・

全てに無気力で無関心で真剣に向き合えない人生なんて、ここで終わった方が無難なのかもな・・・

俺が半ばそんな事をボンヤリと考えていると・・・

「ふっ・・・貴様が『皇の焰』を継承する？無理だな」

突如、久音が言葉を発した。刺客のその言葉に反応しピクツと眉をしかめた。

「何と言った小娘？もう一度、言ってみろ」

刺客は声こそ静かだったが、久音の言葉にカチンツと来たのはまず、間違いない。

俺は小声で彼女に注意した。

「お・・・おい、挑発するな！こっちは唯でさえ追い詰められてんだぞ」

だが、久音は俺の言葉を無視してさらに言葉を続ける。

「聞こえなかったのか？貴様は『皇の焰』を継承するだけの『器』ではないと言ったんだ。『皇の焰』とは六羽の鳳凰かららを統べる迦桜羅皇おうの証・・・貴様如きが触れれば瞬く間にその焰に焼き滅ぼされるのがオチだ」

迦桜羅皇・・・・？
かるらおう

また、聞いた事もない単語に俺は首を傾げるが、今はそれ所ではない。俺は変わらずに刺客を真っ直ぐ、射竦めた。

「小娘ええッ！！俺がそんな無気力な餓鬼に劣ると言うのかっ！」

刺客が激昂すると、久音は呆れ果てた様な笑みを浮かべて言った。

「やれやれ、浅学が滲み出ているよ・・・貴様の様な者を『匹夫の勇』と言うのだろうよ」

刺客は今や顔に青筋を立てて怒り狂っている。流石にこれはもう、不味い！

「久・・・」

「伽瑠羅・・・」

俺が窘めようとする前に久音は俺に言葉をかけた。

「君は決して、無気力な人間ではない」

「え？」

こんな時に何を？俺がそういぶかしむと彼女はさらに言葉を紡いで行く。

「真に無気力な人間ならば・・・こうして生死の境でその様に足掻く事などあるものか。さらに君は自身だけでなく僕までこうして護ろうとしてくれている」

俺はいつの間にか、彼女の言葉に耳を傾けていた。

「誇れ、君はもう、立派に『己』を持っている」

俺は今、自分の感情を量りかねていた・・・何しろ、この様な事を言われたのは初めてだ。よくは分からないが、まるで俺の中で堅く閉ざされていた『何か』を引っ張り出してくれた様な感じだった・・・

そう・・・だな。

俺は左腕に抱えていた久音を下して言った。

「悪い・・・久音。後ろに隠れてくれ・・・すぐに終わらせるから」

すると久音はいつもの優雅な笑みを浮かべて言った。

「ああ、待ってる」

「何をごちゃごちゃ言っているッ！ああ、勿論、終わるさ・・・お前達の首を俺が落としてなあッ！！」

刺客は今まで以上の速度を持って、俺たちに飛び掛かって来た。だが、俺の心はかなり、静かだった。

ああ、そうだ。深く考える必要はない・・・ただ、無心になればいい。

俺はモップの柄をヒビの割れ目から真っ二つに押し折った。

それを見た刺客はギョツとしたようだったが、すぐに哄笑をはらんで言った。

「ハハハハッ！愚かな・・・窮地に陥って自棄でも起こしたかッ？唯一の獲物を自ら破壊するとはッ！！」

だが、俺はもう、そんな言葉には一切、動じなかった。ただ、無心に迫りくる刺客を見据えた。

俺は両手に押し折ったモップの柄をそれぞれ握った。

「二刀流を気取るかッ！だが、そんなに短くなった掃除用具如きの柄で何ができるものかッ！！これで終わりだッ！」

刺客の鋭利な翼が俺に近づく・・距離はもう200もあるまい。だが、俺は冷静だった。

そして、刺客の刃が目前と迫った時、俺は右腕を動かした。右腕にある二つに折った片方の柄の割れ目を刺客の左眼に突き刺したのだ。

「グワアッ！」

刺客は激痛故に残った右眼をも閉じた。その隙を俺は逃さない。すかさず、左腕に握った柄を今度は脇腹に突き刺す。

「アグハアアアッ！！」

刺客の身体全体に途轍もない激痛が駆け巡っているのだろう。刺客は苦悶しながら、地に落ちのた打ち回った。

「こっちに突っ込んで来る事は分かっているんだから、こっちはただ、待てばいい・・てっ言うか、あんたの攻撃はワンパターン過ぎるよ。俺所か、ウチの門下生にすら到底、及ばないな」

俺は刺客を見下ろしながら、冷たい声で言った。

そして、後ろの久音を振り返って肝心な事を聞いた。

「なあ・・この惨状をどうやって説明すりゃいいんだ？」

体育館は今や原型を留めていない程に破壊し尽されていた・・照明は何個も落ちているし、ガラスだって何枚も割れている。と言うか、これじゃあかなり、音を響かせているはずなのに・・何で誰も来ないんだよ？

すると、久音は平然とした顔と声で言った。

「それについては心配ない。それよりも・・・伽瑠羅ッ！」

突如、久音は蒼白な顔になって俺の名を呼ぶ。俺は最初何事かと思ったが、理由はすぐに背後のどす黒い殺気で察した。俺は直ぐに振

り返り、持っていた二本の柄を構える。

すると、そこにはさっきまで、のた打ち回っていた刺客が悠然と立っていた。先程とは比べ物にならない殺気と威圧感を放って・・・

『この・・・糞餓鬼がああ・・・ふざけやがって・・・ッ！ぶぶぶ・・・ぶち殺してやる・・・ッ！』

声もより一層、獣の様な唸り声に変わっていた。

そして、変わって行くのは声だけではない。徐々に翼と腕に胴の筋肉が膨張し皮膚の色まで変わって行った。

俺は余りに予想だになかった事態に言葉を失くして行く・・・

刺客の身体は先程の四倍ほどにまで膨れ上がり、その姿形も最早、人間の面影は微塵も無くなっていた。鋭利な翼はさらに巨大となり鷹の様な爪もより長く鋭い物へと変わっている。そして、頭は禿げあがり代わりに牛の様な角を生やしその顔は大猿の様な面相へと変わり鋭い牙を覗かせている。

因みにさっき俺が確かに傷つけたはずの左目と脇腹は完全に治癒されている様だった。

『ざあ、第二ラウンドだああッ！テメエをぶち殺し『皇の焰』は俺が貰い受けるッ！！』

刺客の獣の様な咆哮に俺は呆れた様に息をついて、言った。

「ああ、そうですか・・・はい」

はあ・・・まったく、本当に面倒臭い事に巻き込まれちゃったな・・・俺。

四つ目の事「皇の焰」(後書き)

一難去ってまた一難・・・伽瑠羅VS牛猿！
次話「迦桜羅皇」へと続くッ！

五つ目の事「迦桜羅皇」(前書き)

体育館バトルもついにクライマックス！
我ながら、三話かけてのバトルになるとは・・・

五つ目の事「迦桜羅皇」

『ギャハハハハハハッ！ぶち殺すッ！！』

刺客は膨張した巨体で飛び立ち、今まで以上の速度で突っ込んで来る。俺は久音を再び、左腕に抱き抱え避ける・・・が、ほぼギリギリの距離だった。

今度は右のわき腹が翼による剣圧で裂け血が飛び出る。そして、刺客はそのまま、壁に激突し体育館に風穴を開けてしまった。何っー滅茶苦茶なパワーだッ！

それでも俺は怯まず次の攻撃に備える・・・が、刺客はと言うと突進した場所から中々、起き上がらない・・・と言うより、何やら苦しそうだ・・・そう言えば、動きも段々鈍くなっている様な・・・？

「ひょとして、奴自身もあのパワーとスピードをコントロールし切れてないのか？」

「のようだね」

久音は俺が述べた推論に同意する。

「おい、やっぱり、これも『計画』の一つの要素って奴なのか？」

俺が問うと久音は相も変わらず、悠然とした態度で言った。

「ああ・・・尤も、あれは失敗作だけだね」

「失敗作っ？」

俺が怪訝な声を出すと久音は頷いて話を続ける。

「さっきも言ったと思うけど『計画』とは人と言う『進化の匣』を開けると言う物だ。例を上げるとすれば、そうだな・・・ダーウィンの『種の起源』には全ての生物種は共通の祖先から自然選択と言うプロセスを経て進化したとある。そう考えれば、人を含めた全て

の生命には同一の遺伝子が眠っていると考えられる」

何か難しい事、言いだしたな・・・けど、分かんない事はない。要するに・・・

「つまり、人には全ての動物の遺伝子が潜在していると、そう言う事か？」

「ふむ、意外と呑み込みが速いな。その通りだ。つまり、この事からも人は自然選択と言うプロセスを経てあらゆる遺伝情報を眠らせた『匣』と言い得るのさ。そして、『計画』とはその眠った遺伝情報を意図的に抉じ開け、身体能力、頭脳共に旧来の人類を超越した新人類を作り出すと言う物だ」

「マ・・・マジでかッ！」

そんな壮大な計画だったのかッ！

「そんな事が現実可能なのか？」

「可能も何も君はその実例を今、見ているんだよ・・・伽瑠羅。まあ、失敗作ではあったけどね」
俺はその言葉に引っ掛かった。

「失敗作って・・・お前、あいつに何かしたのか？」

「何かとは失敬だね。僕と彼は初対面だよ。どちらにしても彼があなったのは彼自身が望んでの事だよ」

「望んだ？　なんで・・・」

すると、久音は間を置いて、口を開いた。

「『皇の焰』を手にする為だろうね」

またも出て来たその言葉に俺は首を傾げさらに彼女を問い質した。

「さっきから何度もその言葉が出てくるけど、その『皇の焰』って何だ？それも『計画』と関係あるのか？」

「関係があるも何も『計画』こそが『皇の焰』の為にある一つの要素なんだ」

「それって・・・どう言う？」

「それはそうと来るよ」

彼女の言葉に俺は「え？」と間の抜けた声を出したが、その瞬間、初めて自分に迫りくる猛獣の特攻に気づく。俺は跳び上がって避けようするが、反応が若干、遅れた為にまともとは行かずとも翼による剣圧が俺の腹部をもろに抉った。

余りの激痛に意識が飛びそうになりながらも俺は咄嗟に久音を抱き締めて、床に激突した際のクッションとなった。

床に激突した時、俺は痛みよりも全身から力が抜けて行くのを感じた。

俺はまず、久音の無事を確認した。良かった・・・どうにか大した傷は負ってはいない様だ・・・ツツ！

突如、鋭い痛みが腹部に走る。朦朧とした意識の中、見ると腹部からどんどん血が滲んでは溢れ出して行く。ははは、こりゃ絶対に死んだな・・・

俺は思わず薄い笑いを漏らした。その横で久音は俺を抱き起こしてくれた。

「伽瑠羅、気をしっかり持てッ！」

「わ・・悪い・・・しくじった・・ッ！ゴフッ！！」

一気に口から血が溢れ出す。はつきり言って口ん中が気持ち悪い・・
て、そんな場合じゃねえか・・

俺の腹からは血が止めどなく流れて行く。

ああ、俺の人生はここまでなのかよ・・・て、言うか戦闘の最中に
話に夢中になって殺られましたじゃあ、親父や祖父ちゃんに知られ
たら怒髪天ものだな・・ああ、お袋や瑠璃はスゲー泣くんだろうな。
いつも、オーバーだからなあ・・・

こんな時にこんな事を考えるなんて本気でやばいな・・・て言うか、
もう、眼が見えねえや・・

そんな時、久音の手が俺の頬に触れたのを感触で感じた。

ははは、もしかして、泣いてんのかな・・・彼女みたいな子でも・・
・等と俺は冗談交じりに思ったが、次に久音の口から出た声はとて
も、泣いていると言う物では決してなく・・寧ろ、強い意志を感じ
させる声で言った。

「伽瑠羅・・まだ、君に死なれては困る・・・君はまだ！」

そう言い終えると唇に何か柔らかいものが触れた。

はははは・・・もしかして、キス？普段なら突然の事にドギマギし
て頭がパンクする所なんだけど、生憎・・そんな元気はもう・・な
いなあ・・・・・

そこで俺の意識はテレビのスイッチが切れた様にプツンと切れる・・
・・はずだった。

途端に俺の心臓と五臓六腑と至る所が急激な熱を発し始めた。それ
によって、俺の視界も一気にクリアとなって行く。そこには久音が

俺にキスをしたまま、俺の身体を押さえ付けていた。それは正解だ。何しろ、俺の全身は火達磨になったのかと思うほどに熱を発し続いていた。余りの熱さに俺は苦悶の叫びを上げながら、のた打ち回っていたのだから・・・

熱いッ！心臓が！五臓が！六腑が！全身が焼けるッ！！

俺の全身はこのままでは発狂してしまうのではないかと思うほどの熱が駆け巡り咆哮を上げていたのだ。

『ぞ・・・それはッ！小娘ええッ！！お前がアマテラスがああああああああッ！！！！』

言葉の呂律すら余り回らなくなった刺客がそんな事を叫びながら突っ込んで来るのが横目に見えた。この時、俺は相変わらず熱が体中を駆け巡っていたが・・・最早、それは苦にはならなかった。寧ろ、しっくりして来たと言っている・・・この時、俺自身は気づいていなかったが、俺の眼は金色に輝き瞳孔は猛禽類の様に鋭くなっていた。

俺はゆっくりと立ち上がり、迫りくる刺客を静かに見詰めた。あれだけの巨体と翼の凶器が迫り来ようとしているのに俺は武器所か、構えすらとらずに距離が縮んで行く牛猿をただ、見詰めた。

『ヒヤハハハハハハハッ！ついに観念したがッ、糞餓鬼があッ！』

と馬鹿笑いしながら刺客は俺目掛けて飛んで来る・・・本当にワンパターンだよな。俺は静かな心でそう思った。

巨大な翼の凶器との距離は遂に0となった・・・が、俺にそれが届く事はなかった。

突如として金色の炎が刺客を弾き飛ばしたからだ。

「ぎゃおッ！」

刺客は一気に仰け反り俺はそれを見下ろす様に見た。そして、俺の周りには先程の金色の炎がまわりついている。と言うより、俺を護る様に側に控えていると言った方がいいか・・・

『金色の・・・炎？ 『皇の焰』だど？ 馬鹿な・・・では・・・ご・・・
ごんな糞餓鬼が・・・本当に迦桜羅皇にッ！』

刺客は信じられない物でも見る様に俺を見ている。その中で久音はあの優雅な笑みをたたえて言った。

「言っただよ。貴様如きは『器』などではないとね・・・今、ここに『皇の焰』は継承され真の迦桜羅皇が降臨した」
久音はどこか恍惚とした表情で宣言する・・・正直、言ってる事はまだ、よく分からないが、これだけは分かる・・・

俺は全てを凌駕した力を手にしたのだ。

『ぶ・・・ツぶざけるなあッ！ 迦桜羅皇になるのは俺だああッ！』
刺客はまだ、諦め切れないのか再びワンパターンな攻撃をし掛けようとしたが、その前に俺は金色の炎を刺客の周りにまわりつかせ、阻止し自分でも驚く程に静かで厳かな声で言った。

「去れ、哀れ者よ・・・そなたでは余に傷一つ、つける事すら罷り成らぬ」

『な・・・なにい・・・ッ！』

「哀れ者よ、そなたは自然の理を捻じ曲げてまで、我が力を求めたな。されど、所詮は付け焼刃・・・その様な力で余の座を求めようとは何たる増長傲慢・・・死して贖え」

俺が放った言葉に刺客は一瞬、かなり、びびった様だった。それ程、強く言った覚えはないけど・・・

「されど、無駄な血を流すは余の本意には非ず、悔い改めこの場を去ると申すなら此度は不問とす」

我ながらよく、そんな偉そうなことをペラペラと喋れたものだ和我ながら、感心する。だが、自然と違和感はない。

一方、刺客の方は俺の上から目線の口調によっほど、腹を据えかねたのか、顔を真っ赤にして怒鳴る。

『ぶざげるなああああッ！！グゾガギイッ！！なにじゃまのづもりだあああああああッ！！！！』

まとわりついた炎を絡めながら、刺客は特攻をかけた。

「哀れな・・・とうとう、言葉まで失くしたか・・・致し方あるまい」

俺は無意識に印と言うものを結び、呪文を唱えた。

「オン・ガロダヤ・ソワカ、オン・キシバ・ソワカ」

すると、刺客にまとわりついた金炎は一気に大きくなり刺客を瞬く間に火達磨にした。

『グギヤアアアアアアアッ！！！！』

「迦桜羅焰ッ！」

刺客は凄まじい迦桜羅焰に焼き尽くされながらも、悪態を俺に向かって吐いていた。

『グズガキがああッ！！よぐも、オデおおおッ！！！！』
それに対して俺はこう答えた。

「餓鬼ではない・・・余は」

俺は右拳を握り締めて迦桜羅焰をさらに強大にして刺客を跡形も灰すら残さずに焼き滅ぼした。

「余は・・・迦桜羅皇なり！」

この日・・・俺は自覚し理解し確信した・・・俺は平穩とは・・・人間とは程遠い生き物になった事を・・・
そして――

五時間後・・・

校長室

「そうか・・・ついに迦桜羅皇が目覚めたか！！」
校長は子供の様に興奮覚めやらぬと言う顔で狂喜した。それに対し

久音はやはり、あの優雅な笑みで相對していた。

「はい・・・思った通り、彼は最高の『検体』でした」

「それで彼はどうしているかね？」

「覚醒したばかりで力を使った事もあり、あの後、すぐに倒れてしまいました。」

「そうか・・・それで容体の方は？」

「まったく、問題はありません。『劣化品』に受けた傷も既に快癒しております」

「そうか、そうか、それは大いに結構だ・・・あははは！」
余りに嬉しそうな顔に久音は失笑して言った。

「嬉しそうですね、校長」

「それはそうだとも、漸く求めていた『成果』を得られる段階に入れたんだからねえ・・・嬉しくないはずがないじゃないか」

「ええ、そうですね」

久音も笑みを浮かべて言った。

「これからの経過と成果で世界の命運が決まる・・・期待しているよ、鵠皇君」

その言葉に久音は一瞬、間が空いたものの、何時も通りの優雅な笑みを浮かべて言った。

「ええ、勿論です。僕はその為にここへ来ました」

五つ目の事「迦桜羅皇」（後書き）

と言う訳で伽瑠羅、覚醒です！

尚、次話からは私自身が物語の語り部となります。流石に伽瑠羅の視点からでは表現し切れない箇所が多々あるので・・・

六つ目の事「節目」

体育館での戦いの後、伽瑠羅は力が抜け落ちた様に倒れてしまった。そんな彼を久音は介抱して寮の彼の部屋まで運んだ。

そして、伽瑠羅はまた、夢を見ていた。そう・・・あの荒野の夢を・・・

「暫くぶりだな、小僧・・・いや、今は迦桜羅皇だったか」

例の如く黒いローブの男が背後に現れ、伽瑠羅はハツとなって振り返った。

「あんたか・・・つか、変な名前と呼ぶな。耳がこそばゆくなる」

男はそれには答えず話を続けた。

「汝はまだ、理解していないようだ・・・迦桜羅皇となった意味を」

「さつきから、どいつもこいつも俺の事を迦桜羅皇って呼んでるけど、それって確か仏教守護の神の一人だよな」

伽瑠羅の問いに男は意外そうな声を上げる。

「ほお・・・見かけによらず博識だな」

「そりゃ、漢字こそ違うが、俺の名前の由来にもなってるからな・・・親父にさんざん言い聞かせられたよ。偉大な神の名に恥じぬ様に生きろとか何とか・・・」

「それにしても随分な腑抜けに育ったものだな」

「またも痛い所を突かれ言葉に詰まる伽瑠羅に男は嘆息をつきながら、話を続ける。」

「まあ、いい・・迦桜羅皇とは生命の焰と六羽の鳳凰を統べる霊鳥の皇だ。」

「い・・生命の焰・・『皇の焰』の事か？」

「然り・・されど、『皇の焰』とは迦桜羅皇にとっては些末な要素でしかない・・真の根本は寧ろ・・・」

「寧ろ・・・？」

伽瑠羅がオウム返しに聞くと・・・

「いや・・止そう。それは汝が見極めねばならぬ事・・その日家で息災で在られよ、迦桜羅皇」

すると、不意に周囲が呑み込まれる様に真っ黒に変わって行く。

「おいッ！待・・ッ」

伽瑠羅は周囲が消えていく中、男に迫いすがろうとするが、そこで夢は終わった。

気づいた時には寮の自分の部屋だった。電子時計は深夜一時を指し示していた。それを見た伽瑠羅はベッドから起きると冷蔵庫から水のペットボトルを取り出し口に運んだ。

一気に飲み干すと、伽瑠羅は大きく息をついて、先程の夢について考えていた。

本当に奇妙な事になったな。鵠皇久音・彼女と出会ってから面倒臭い事ばかりだ・・・

人体発火にミュータントの刺客・・・さらには新人類を人工的に生み出し世界を変えると言う『計画』に『皇の焰』と呼ばれる力・・・そして、その力を俺は・・・恐らく・・・手にした・・・ッ！

「おまけに迦桜羅皇？たくっ・・・勝手に他人に変な名前を付けるなよな」

伽瑠羅は一気に後ろからベッドに倒れ込んだ。そして、今更ながらに気づいたが、体育館で受けた傷は既に完治していた。勿論、致命傷に見えた腹部の傷も含めてだ。

「これも『皇の焰』とやらの力なのかね・・・何か我ながら気色悪いな・・・まあ、そのお陰で命拾いした訳だが」

服をめくり、傷一つない腹部を見て伽瑠羅は眩く様に言った。

さて、明日は久音に事の全貌を教えて貰わなきゃな・・・でなきゃ自分の身体ながら、気味が悪くて夜も眠れん・・・ん？

そこで伽瑠羅は自分の胸の所に紋様が刻まれている事に気づく。すぐに上の服を脱いで見て見ると、そこには金炎を象った刺青が心臓の位置にはっきり刻まれていた。

「何だ・・・これ？これも明日、久音に聞いてみないとな・・・」

伽瑠羅は嘆息を付きながら言ってベッドに戻った。

翌日、伽瑠羅は身支度を整え学園へと向かった。その途中、体育館を見たが、警察や警備員などが張り付いて立ち入り禁止になっていたまあ、当然だよな。刺客もそうだけど、俺も・・・その色々、やり過ぎちゃったし・・・

伽瑠羅は溜息を付いた。何しろ、あれだけの被害を出したのだ。警察を呼ばない方がおかしい。

気を取り直し教室へと一直線に向かう前で庸輔が慌てた様子でこっちに駆け寄って来た。

「おう、おはよう、庸輔。」

伽瑠羅が挨拶すると庸輔はさらに慌てて言った。

「おはようじゃないよ、伽瑠羅！」

「え、何がだよ？」

伽瑠羅が首を傾げて問うと庸輔から出た言葉は予想だになかった言葉だった。

「鷓皇さんが―誘拐されたんだよッ！」

「え？」

余りのインパクトに伽瑠羅から出た言葉はそれだけだった・・・

今、伽瑠羅はあらゆる意味で一つの節目を迎えようとしていた。

六つ目の事「節目」(後書き)

今回はここまでです。

短くてすいませんッ！でも、タイトル通り、伽瑠羅も久音もこの後、一つの節目を迎える事と相成ります。次話をどうか、ご期待下さい！

七つ目の事「六鳳家」

久音が目覚めた時、そこは真っ暗な居室だった。

久音は身を起こすと自分がそこにいる以外は手も足も全く、縛られてはいない事に気づく。

「やれやれ、舐めているのかな・・・これは」

久音は半ば呆れた様な声でそう呟きながら、昨日の事を思い出した。

あの戦いの後、倒れた伽瑠羅を介抱し寮の彼の部屋まで連れて言った後、校長に事後報告し自分の部屋へ戻ろうとした帰り道、突如、後ろから何かを嗅がされたのだ。それから後の記憶がない・・・気づいたら、ここに囚われの身となっていると言う次第らしかった・・・

久音は嘆息をついて自分の迂闊さを少しだけ呪った。

やれやれ、本当に僕も油断したな・・・こんな古典的な方法でかどわかされるとは。

その時、突然光が自分に向けられ久音はたじろいだ。そして、その光の先には一人の男がこちらを見据えていた。

その男は肩にまでかかる程の長髪でかなりの美丈夫だ。そして、その服装は何と六鳳学園の制服だった。

だが、久音は少し、面食らった顔はしたもの、すぐにいつもの取りすました顔で男に声をかけた。

「北鳳院ほくほういんか・・・生徒会長が誘拐とは随分、物騒だね」
すると、男・・・北鳳院は平然と答える。

「こちらでも問い質したい事が色々、あったからな、迦桜羅皇を選ん

だと言うのは本当か？」

「相変わらず、耳が速いね。しかし、選んだと言うのは語弊があるね・・・彼が適合出来たのは偶々の産物だよ？」

しかし、北鳳院は真に受ける事はなく眼を鋭くして言った。

「白々しい事を・・・いつもの様に確信があつての事なのだろう？」

「さてね・・・」

久音の方も相変わらず読めぬ表情ではぐらかす。

が、北鳳院は一層、厳しい眼で話を続ける。

「迦桜羅皇とは『皇の焰』と我が北鳳院家を含む六羽の鳳凰を従える霊鳥の皇・・・それに何故、どこの馬の骨とも知れぬ男子生徒を据えた？」

「じゃあ・・・平野校医の方が良かったのかい？」

久音がそう問うと北鳳院は嘲るような声で一笑に付した。

「フッ、あんな男は物の数にも入らん。あの様な琳鳳寺家りんほうじの分家も分家の血筋でしかない男に『皇の焰』が頭を垂れるものか」

「ふむ、辛辣だね」

久音が面白そうな声で言うのと北鳳院はさらにきつい眼で久音を睨み付けた。

「他人事の様に言うな。そもそも、お前があの様な下種に『洗礼』など施すから、あの様な騒ぎと相成ったのだぞ！」

すると、久音は眠たそうな眼でこう返した。

「あの時は彼からしつこく、せがまれた物だからねえ・・・僕としてもそれで迦桜羅皇が目覚めるなら、それに越した事はなかったし・・・」

「心にもない事を・・・あの男がその様な『器』では在り得ぬと言

う事くらい、『天照』であるお前に見抜けなかったはずはあるまい」北鳳院がそう問い質しても久音は動じずに依然、優雅に微笑むだけだった。それに少し、苛立ったのか北鳳院は久音の顎を掴み上げて言った。

「とぼけるなよ。お前は敢えて、あれを餌にその男子生徒を巻き込んだのだろうかッ」

「成程・・・そう言う見方も出来るね・・・」

この期に及んで尚、はぐらかす久音に北鳳院はその右頬を平手で打った。しかし、久音はそれにすら動じず悠然とした態度で北鳳院に言う。

「いずれにしても、迦桜羅皇は目覚めた・・・君も六鳳筆頭の北鳳院家次期当主ならば、皇となった彼に忠誠を誓いたまえ」

すると、北鳳院は不敵な笑みを浮かべて言った。

「フッ、それは果たして、どうかな？」

「それはどう言う意味かな？まさか、迦桜羅皇に謀反でも起こそうと言うのかい・・・」

久音は半ば瞳に殺気を宿して問い質す。しかし、北鳳院は少しも怯む事はなく言い返した。

「我々六鳳はまだ、彼を迦桜羅皇と認めてはいない。そもそも、先達達の『劣化品』との戦闘では致命傷に相当する手傷を受けたそうだな？そんな脆弱者を突如、我らの皇だと言われて納得できるものか」

「まさか・・・君はその為に僕を・・・ッ！」

北鳳院の思惑を察した久音は鋭い視線を北鳳院に浴びせる。

「真に迦桜羅皇として覚醒したならば、たかだか数体の『劣化品』風情に・・・負けるはずがないだろう」

北鳳院は口元を歪める様な笑みを漏らして言った。

久音はその言葉で自分の推測を確信した。この男は自分を餌にして伽瑠羅を誘き寄せるつもりなのだ。途端に彼女の顔に怒りの朱が走り何時にない怒鳴り声を上げる。

「何と言う事を・・・ッ！！唯でさえ、体育館の件は詳細を知らずとも生徒や教師達が騒いだばかりと言うのに・・・その様な事をすれば、君の父上を始めとした六鳳の現当主達が黙っているはず・・・ッ！」

「無論、父を含む六鳳家全ての当主達から許可は既に取ってある」その言葉に久音は一瞬、絶句した。

六鳳の当主とも在ろう者達が主君たる迦桜羅皇に弓を引くと言うのかッ？

余りに信じられないと言う顔をした久音に北鳳院は冷徹な顔で言った。

「父達も六鳳家の血筋ですらない人間に頭を垂れるなど納得がいかなかったのだろうよ。そこで彼の実力を量ってみようと言う事で意見が一致したのだ。お前を餌としてな」

「随分・・・分の悪い賭けだね。彼と僕は知り合って一月も経ってはいない。そんな僕の為に彼が君達の挑発に乗るとでも？」

久音は精一杯の抵抗にそう挑発するも北鳳院はにべも無く即答した。「乗るさ。たとえば、そうだとしても彼自身、自分の変化に戸惑いそれを正しく知りたいと願っているはずだ。そして、それを知る唯一の手掛かりは現状ではお前以外にはいない。よって、彼の選択肢は自ずと一つしかない訳だ」

核心を突かれ、久音も齒嚙みする以外になかった。

一方、北鳳院はどこか楽しげな顔をしていた。

これで舞台は整った・・・後は幕を開くだけだ。

一方、教室では伽瑠羅は庸輔や稟星に警官から事のあらましを聞いていた。

庸輔が言うには久音は昨日から寮には帰っておらず当然、学園にも来てはいない。そして、今朝になって匿名の電話が来て、彼女を誘拐したと言って来たらしい。そして、誘拐事件のお約束とも言うべき要求はこの上もなく変てこな物だった。

『鵠皇久音と同クラスの生徒、祠堂伽瑠羅一人でこちらが指定する場所まで来い』

ただ、これだけだった。身代金などの要求は一切、なかった。学園側も警察もこの要求には首を傾げ困惑していた。

「だ・か・ら！・・・大変なんだってばッ！」

庸輔はもう、てんぱっていた。

「我々もほとほと弱っている・・・これが身代金等であればまだ、合点も行くが・・・何故、君を・・・？」

警官達もすっかり、訳が分からないと言う顔で首を傾げている。その様子に伽瑠羅は同意した。

そりゃ、そうだ。俺だって何が何だか訳が分からん・・・まあ、多分に『計画』がらみなのは間違いないだろうけどな。なら、すべき事は一つ・・・か。

伽瑠羅はもう、腹を決めて言った。

「事情は分かりました・・・俺が行きます」
すると、周囲は当然、反対の声を上げる。

「な・・・何を言ってるんだよ、伽瑠羅ッ！」

庸輔は仰天して伽瑠羅の肩を揺さ振ったし稟星も諭す様な声で言う。

「それは賢明な判断とは言えないね」

警官達も揃って伽瑠羅の判断に難色を示した。

「祠堂君、残念だが、私達も警官としてそれを許す訳にはいかない。鷗皇さんが心配なのは分かるが、ここは辛抱しなさい。いいね？」すると、伽瑠羅はこう言い返した。

「けど、犯人は俺がその指定の場所まで来る様に要求して来たわけでしょう？」

「そ・・・それは・・・」

警官がどもとさらに伽瑠羅はさらに畳み掛ける。

「それに、俺が行かなきゃ鷗皇が危険な目に合う可能性の方がよっぽど大きいんでしょう？だったら、俺は行きます」

そこまで言うのと、警官達も困惑した表情を浮かべた後、諦めた様に息を付いた。

「分かった・・・ただし、その換わり監視を付けさせて貰う」

「ありがとうございます」

伽瑠羅は頭を下げた後、庸輔と稟星の方を向いて言った。

「庸輔、そう言う訳なんでちょっと、行って来る。稟星さん、親父やお袋には上手く言っというて下さい」

「仕方ないね・・・気を付けて行っておいで」

稟星は嘆息を付きながらも笑顔で見送る。

「き・・・気を付けてッ！」

庸輔はと言うとオタオタしながらもエールを送ってくれた。

「おう」

それだけ言うと伽瑠羅は教室を出て駆けて行った。

その頃、北鳳院は江戸時代の造りを思わせる日本邸の廊下を歩いていた。そして、ある角を曲がり、その障子を開けた。すると、そこから声が飛び出す。

「突然に何だ？不躰まさおみだな、雅臣」

そこは茶室らしく、その真ん中では金髪に染めた長髪を後ろで纏めた男が袴に身を包んで茶を点てていた。

「不躰は承知の上だ。敦平あつひら、頼みがある」

北鳳院がそう言うと言男―敦平は茶を点てていた手を止めて、残忍な笑みをそちらに向ける。

「迦桜羅皇の事か？」

敦平がそう問うと北鳳院は少し、不機嫌な声で反論する。

「まだ、そうと決まった訳ではない」

「て言っただ、決まった事には変わりねえだろ。姫さんが『洗礼』して成功したってんだから」

すると、北鳳院は一層、厳しい声で言う。

「お前は相も変わらず、物事を安易に考え過ぎる。いいか？迦桜羅皇とは帝から六羽の鳳凰を冠する事を許された我々六鳳家をも統べる皇だ。それが馬の骨とも知れぬ一般生徒が据えられたのだぞ？前代未聞の事態だ」

それに対し、敦平は獣の様な笑みを浮かべて言った。

「それで、俺にどうしろと仰るんで？六鳳筆頭家、北鳳院家次期当主殿」

その慇懃な態度に北鳳院は頭を抱えながらも言った。

「その男子生徒を試せ・・・と言っているのだ、鳳乃宮家次期当主たかのみや」

すると、敦平は一層、ニヤニヤした貌になる。それを見て北鳳院は少し、ムツとなって尋ねた。

「何がおかしい？」

「言葉が足りねえな・・・」

「は？」

顔に？マークを出す北鳳院に敦平はこう言った。

「本気で殺す気で試せ・・・だろ？」

すると、北鳳院も不敵な笑みを浮かべその言葉を肯定する。

「ああ、無論だ。ただし、心してかれよ。これには我ら六鳳家全ての威信が懸かっていると思え」

「分かってるって、俺を誰だと思ってんだよ・・・おいそれと一般人にやられる程、腑抜けてねえって」

と敦平はペロと舌なめずりした。

「期待しているぞ・・・」

かつてない暗雲が空を覆っていた。

七つ目の事「六鳳家」(後書き)

かつてない強敵、登場！
六鳳家の実力や如何にッ！？

八つ目の事「一対千」

伽瑠羅は警察から盗聴器や発信器を手渡され、それを制服の内側に仕込み犯人が指定した場所へと急いだ。警官達もその後を尾行し観察する。

伽瑠羅は指定された場所へと向かう。そして、指定された場所は・

・
「公園かよ・・・」

そう・・・指定された場所は六鳳学園都市にある観影公園と言う公共の公園だった。

「こんな所に呼び出してどうしよってんだよ・・・」
伽瑠羅は頭を抱えた。

まったく・・・誘拐犯の目的が金銭的な事ではなく『計画』がらみだと言う事はどことなく理解は出来る。だが、こんな所へ俺を呼び出して何の得が誘拐犯にある？

そもそも、久音を誘拐したのは誰なのだろうか？昨日の刺客の様に『皇の焰』が狙いの奴なのだろうか。

と言うか、こうして俺が来ても久音は本当に解放されるのだろうか？もし、俺自身を誘き寄せる事こそが目的だったのだとしたら・・・
・
・
・
・
・
・

そこで、伽瑠羅は背筋が今更ながらに凍って来た。

『それは賢明な判断とは言えないね』

おまけに稟星さんの言葉まで甦って来やがった・・・我ながら情けない事この上ないなあ・・・おい。もしかしたら、昨日の様なミュー

タントが突然、襲って来るとかじゃないだろうか？

どうせなら、家にある刀を装備してくりゃよかったかしら・・・いや、警察が監視している手前、銃刀法違反で即お縄だわな。

ああ、せめて木刀でもいいから自衛の為って事で持ってくりゃ良かった。まあ、今じゃ後の祭りな訳だが・・・

そうあれこれ考えていると突然、風がザワと騒いだ。伽瑠羅はそれを感じとり自然と身体が臨戦態勢をとる。

なんだ・・・これは？突然、無数の殺気が俺を指し貫いてやがる・・・ッ！

伽瑠羅はジリジリと自分の間合いを詰めて行く。

そして、そんな伽瑠羅を一瞥する者が公園の大樹の上にいた。その男は六鳳学園の制服に身を包んだ金髪の青年―敦平だった。彼は伽瑠羅がこっちが向けている殺気に反応し間合いを詰める様子を見て口笛を吹いた。

「ほう・・・流石に気付きやがったか・・・剣道場の跡取りってのもあながち嘘でもなさそうだな。だが、肝心なのはここからだぜ・・・」

「敦平はじゅるりと自分の頬を舌なめずりし周囲に潜む者達に号令を発した。」

「じゃあ・・・殺れ」

その途端に物凄い轟音と共に異形の生物達が伽瑠羅目掛けて突っ込んで来た。

その中には昨日の刺客と同じ蝙蝠の翼を持った牛猿もいれば下半身が蜘蛛で上半身が蟷螂と言う怪物もいる。中には頭は鷲でその下は

虎で蛾の羽を生やしているやつもある。

しかも、どいつもこいつも半端な大きさじゃない。人間は元より実際の動物の何倍もの体格をしている。それ以前に何て数なのだ……少なくとも見積もっても千はいるだろう……

今や、公園は『百鬼夜行』の如き様相を呈していた。

当然、この異常事態に監視についている警官達も呆然となりながらも出て来た。

それを見た伽瑠羅は思わず叫んだ。

「馬鹿ッ！出て来んなよ！」

「ああ、そーいやサツもいるんだったな……一人残らず殺せ。後が面倒だし水を差されても詰まらねえ」

敦平は怪物達にそう命じた途端に怪物達は出て来た警官達をその身体凶器で次々と首や胴、四肢などが鮮血と共に宙に飛び一人残らず屠られて行った。

一気に公園内に散らばる血と肉片……中には腸などの内臓が飛び出ているものもある。

伽瑠羅は一瞬、吐きそうな顔になるが、そうしている間に怪物達の一閃が伽瑠羅に襲い掛かる。

「戦場で吐きそうになってる場合か？そうら、次々と来るぞ……」敦平はいたぶるような声で言うのと同時に怪物達の攻撃が全て伽瑠羅にヒットする。

それを見た敦平は詰まらなさそうに欠伸をした。

「何だよ……随分、呆気ないな。ま……所詮は町道場の竹刀剣法なんてこの程度か」

と大樹から降りようとした時、敦平は不意に上を見上げ眼を見開いた。

何と、伽瑠羅は攻撃がヒットする直前に真上に高く跳んで避けていたのだ。すると、敦平はたちまち狂喜の色を含んだ笑みを浮かべた。「ハッ！そうこなくっちゃだッ！」

伽瑠羅は自分でもかなり、驚いていた。昨日までの自分なら確実に今の攻撃をまともに喰らい死んでいただろう。だが、今はこの上もなく身体が軽い！しかも、それだけじゃない・・・視力や聴覚などの五感がこれまでにない程、研ぎ澄まされているのが分かる。

その気になれば、ここから二km先の家の屋根にだって一度の跳躍で跳び移れるだろう。

本当に俺の身体・・・どうなっちゃったんだよ・・・だけど、これなら――

伽瑠羅は跳躍から落ちて来る際に右腕を真下の怪物達目掛けて刀を使うように振り上げた。すると、それによって凄まじいまでの剣圧が発生し金炎を伴って怪物達を薙ぎ払った。忽ち、四散し燃え上がる怪物の肉片。

「ほう・・・覚醒したばかりで迦桜羅焰を使えるのか？元一般人にしては中々、楽しませてくれるじゃねえか」

地上に着地した伽瑠羅は周囲を見回す。怪物の群れが自分を円状に囲んでいる。先程の剣圧でかなりの数を屠ったはずだが、それでもまだ、数が多い。長引けば不利になる一方だろう・・・伽瑠羅は冷静に状況を分析しながら、構えを取り続ける。

「そう・・・いくら、迦桜羅焰でも考え無しに使ってりやすぐに精神

力の方が尽きる・・・そうなればジ・エンドだッ」

敦平は舌なめずりをしながら、その事実を指摘する。

伽瑠羅は意を決し迦桜羅焰を右手に纏わせる

「おいおい、人の話を聞いてなかったのか？まあ、事実聞いてねえけど・・・ただ、闇雲に迦桜羅焰を使っただってこの数は倒せやしねえ。その前に靖も根も焰に取られてお前自身が死ぬぜ」

それを見た敦平は呆れたような声で呟く・・・が、次の瞬間には彼の顔は驚愕に塗り潰されていた。

伽瑠羅の右手に宿した金炎が剣の様な形へ変化して行く。そして、焰の剣を怪物達に向けると剣の切っ先が怪物の群れを突っ切るまで伸びた。

そして、その剣先はさらに鎖の形状に変化し乱回転して怪物達をドミノ倒しの様に斬り倒し燃やして行く。

敦平は心の底から度肝を抜いていた。

こいつ・・・迦桜羅焰をここまで・・・ッ！雅臣よ・・・お前は一般人なぞは取るに足らんと言ったが、こりゃあ、もしかすると案外・・・いや、相当に一筋縄じゃいかなくなるかも知れんぜッ！

敦平は予想外の事態にも拘らず寧ろ、愉快的な笑みを浮かべて見せた。とその時――

焰の鎖で怪物達を粗方、屠った後に伽瑠羅は突如、焰の鎖を敦平がいる大樹目掛けて飛ばして来たのだ。途端に大樹の上の緑が消し飛び隠れていた敦平の姿が露わになる。

これには流石の敦平も面食らった顔をして、地上の伽瑠羅を見つめ

た。

「さっきから高みの見物を決め込みやがって気持ち悪い・・・生憎だけど、あんたの悪趣味な視線に気づかない程、俺も鈍くはないぜ」

伽瑠羅は樹上の敦平を睨み据えて言うと、敦平は舌なめずりをして猛禽類の如き貪欲な笑みを浮かべ樹上から地上へと降りた。

「成程な・・・流石、迦桜羅皇は伊達ではないと言う事か。最初は暇つぶし程度のつもりだったが、どうやらそれは改めなきゃならねえようだな」

と称賛の言葉を口にしながらも伽瑠羅とのジリジリと間合いを詰めて行く。

一方、その姿を認めた伽瑠羅は少し、面食らった顔をして口を開いた。

「あんた・・・確か、鳳乃宮先輩だよな。茶道家元の・・・あんたまで『計画』がらみの人間だったのかよ」

鳳乃宮敦平は伽瑠羅でも知っている男子生徒だ。何しろ、このルックスに茶道家元の名家、鳳乃宮家の後継者と来ているのだから、嫌でも眼に入ってくる・・・

「ほう・・・先輩の顔を覚えているとは中々、感心だな後輩」

敦平は徐々に伽瑠羅との距離を詰めて行く。伽瑠羅もそれを感じ取り自分の間合いを見定める為、臨戦態勢を取り続けている。

「あんたも昨日の奴のように『皇の焰』狙いで来たのか？」

臨戦の構えを取りつつ伽瑠羅が問い質すと敦平は鼻で笑って答えた。「ハッ！俺をあの様な身の程知らずの『劣化品』と一緒にしてく

れるな。寧ろ、逆だ」

その言葉に伽瑠羅は眉を顰める。^{ひそ}

「逆？」

「俺は迦桜羅皇であるお前に仕える宿命の星に生まれた者だ」^{さだめ}

その言葉に伽瑠羅は面食らった顔になる。

「お・・・俺に仕えるッ？」

「そうよ・・・お前はこの学園都市『六鳳学園』の名の由来を知っているか？」

その問いに伽瑠羅は難無く答えた。

「そりゃ・・・そのまま六羽の鳳凰って意味じゃないのか？事実、ウチの校章は六羽の鳳凰・・・ッ」

そこで伽瑠羅は昨日、体育館で久音が刺客に言った言葉を思い出した。

『『皇の焰』とは六羽の鳳凰を統べる迦桜羅皇の証・・・』

「ふっ、どうやら思い当たる節があるようだな」

伽瑠羅の表情を読み取ったのか敦平が不敵な笑みを浮かべ、さらに話を続ける。

「そう・・・その六羽の鳳凰とは我が鳳乃宮家を含む帝から鳳凰を冠する事を許された六つの神族、六鳳家の事を指す。そして、この『六鳳学園』は我らが皇であるお前を迎える為に我ら六鳳家が造った神殿であり神都ですらあるのだ」

「お・・・俺の為に・・・？」

余りに衝撃的な内容に呆然となる伽瑠羅だが、すぐに気を引き締めさらに問い掛ける。

「じゃあ・・・そのあんたらの皇である俺を何故、殺そうとする？」
すると、敦平はあっけらかんに言った。

「まだ、認めてはいねえからだ」

「は？」

伽瑠羅は正直、何を勝手な事を言っているのだと言う素直な感想を抱いた。

勝手に人の事を自分達の皇だ何だと勝手に言っておいて、今度は認めていないから殺す？どこまで自分勝手な連中なんだ六鳳家ってのは・・・

その心中をまたも伽瑠羅の表情から読み取ったのか敦平は頭をクシヤクシヤして少し申し訳なさそうに言った。

「と・・・言うのが親父たち現当主と雅臣の考えだ・・・何しろ、姫さんがお前に『洗礼』を施した挙句見事に迦桜羅皇になっちまったもんだから・・・六鳳家はてんやわんやさ。自分達を統べる者が何つーの？六鳳の一門ですらない一般生徒がなっちまったもんだから難色を示す奴が多数と来た・・・だから・・・」

そこで敦平の姿が消えた。伽瑠羅はギョツとしたが、背後に殺気を感じ瞬時に今の位置から飛び退く。すると、その位置には先程まで前方にいた敦平が上段回し蹴りを繰り返していた。

「迦桜羅皇となったお前を試せ・・・と言うのが六鳳家の総意だ」

こいつ・・・いつの間に・・・ッ！違う・・・違い過ぎるッ！昨日の刺客とも・・・先程の化け物の軍勢とも！

敢えて、言うならば・・・遥かに・・・規格外ッ！

この時、伽瑠羅は生まれて初めて畏怖と言う感情をこの男に覚えた。一方、敦平はあっさり初撃をかわされたにも拘らず、その余裕には一瞬の揺らぎもない覇気を全身に漂わせていた。

「ほう・・・やはり、面白いな・・・お前。精々、楽しませてくれよう？くれぐれも、途中でぶっ壊れるなんて事がねえようにな・・・ッ！」

敦平は獲物を甚振ろうとする肉食獣の様な笑みを浮かべ舌なめずりをする。途端に伽瑠羅の背中をゾクツと凍らせるような感触が這いずり廻った・・・

八つ目の事「二対千」(後書き)

次話・・・死闘開幕・・・ッ！

九つ目の事「天叢雲劍」

敦平の蹴りが光速とも言える速さで伽瑠羅に襲い掛かる。

伽瑠羅は辛うじてそれを避けているが、どれもほぼスレスレな際どい物だった。

何なんだよ、こいつはッ！明らかに身体能力が人間は愚か、ついさっきの怪物達のレベルすら遥かに超えてやがる！身体能力が飛躍的に上がってるらしい俺でも攻撃をかわすだけで精一杯だ。

などと考えていると敦平の蹴りが伽瑠羅の腹部にモロにヒットし伽瑠羅は公園の端まで吹き飛ばされた。

「おいおい、それで終いか？途中でぶっ壊れてくれるなど俺は言っただけだな」

敦平は圧倒的な余裕を見せ付け伽瑠羅を見下ろしている。

伽瑠羅はかろうじて、起き上がり前方の敦平を睨む。

強い！鳳乃宮敦平・・・確か茶道をやってる傍ら空手もかじっていて喧嘩慣れもしてるって噂に聞いていたが、これはどう見てもかじっているなんて生易しいレベルじゃない・・・達人など足元にも及ばない規格外とはこいつの事だ！

「あんた・・・一体、何者だよ？それ明らかに人は所か、さっきの化け物の身体能力すら軽く超えているだろう。それとも、それも『計画』の産物なのか？」

伽瑠羅が問うと敦平は小馬鹿にしたような笑みを浮かべて言った。

「あああん？何を寝言を言っでやがる。『計画』とはあくまで一般人^{ジェネティック・ボックス}どもの遺伝子匣を無理矢理、抉じ開けて新人類ならぬ超人類に変えるって計画だ。元から超人類をも超える神族である俺達六鳳家には何ら必要性はない」

「それなら、どうしてそんな計画を？」

「強いて言うなら超人類による理想郷^{ヴァルハラ}を作る為・・・だな」

話を聞いた伽瑠羅は拳を握り絞めキツと敦平の方を見る。

超人類？理想郷^{ヴァルハラ}？あの化け物の群れがかよッ！

そんな伽瑠羅の思考を読んだように敦平は哄笑でもってそれを否定した。

「ああ、さっきの奴らは違うぜ。ありゃ『劣化品』どもだ」

「『劣化品』ッ？」

「ああ、そうさ。遺伝子匣^{ジェネティック・ボックス}を抉じ開けるってのは言葉通りの荒療治って奴でな。大抵はさっきの連中の様に開け放たれた膨大な遺伝子が暴れて結果、ああ言う異形の獣に成り果てちまうのさ。それじゃあ違うのよ」

その言葉に伽瑠羅は半ば納得した。

成程・・・さっきの化け物の群れにしても昨日の刺客にしても解放された多数の遺伝子が暴走した結果って事か。なら、あのどんどん理性がなくなっで行ったのも頷けるな。

「何が違う？」

その事実にかんがりの嫌悪を抱きながらも伽瑠羅は敦平に先を問い質した。

「俺達が目指してんのはあくまで進化した『人間』だ。お分かり？この違いって奴が。異形の類になったり、ましてや、理性がなくなっちゃ何の意味もない訳よ。人間としての姿はそのまま且つ人間以上の力を持った『検体』が理想的な訳よ」

伽瑠羅はますます、嫌悪を露わにした顔になり言った。

「俺はそれ程、難しい事はよく分らんし・・・あんた達の目指している理想郷とやらも全く分からない・・・が」

「“が” 何だ？」

敦平はキョトンとした顔と声で聞き返す。

そして、伽瑠羅は再び迦桜羅焰を出しそれを無数の火の玉にして敦平を目掛けて飛ばす。

「反吐が出るッ！」

キッパリと言った伽瑠羅に対し敦平はハッと鼻で笑って自らに襲い掛かる黄金の火の球を左手一つでかざして伽瑠羅の方へと弾き返した。

「なッ！」

思わず、虚を突かれた伽瑠羅は自らの火の球をともに喰らい再び派手に吹き飛ばされる。

一方、敦平は涼しくも狂気に満ちた笑みを浮かべて伽瑠羅に近付いて行く。

「先程もそうだが、昨日、覚醒したばかりで迦桜羅焰をここまで使

いこなすとはな・・・だが、この程度の応用じゃ俺様にはかすり傷一つ負わせられりやしねえよ」

伽瑠羅はすぐに立ち上がり臨戦態勢の構えを取る。

迦桜羅焰を片手だけで防いだけじゃなく・・・こっちに弾き返しやがったッ！偉そうな事を高飛車に言うだけあってこいつ・・・確かに格が違う・・・！

「ほう・・・自ら最強とも言える焰をその身に受けて尚、立つか？その気概は大いに買うぜ。だが――」

敦平は瞬く間に伽瑠羅の正面それも至近距離に現れその正拳突きを伽瑠羅の腹部に打ち込み、伽瑠羅の口から大量の血が噴出しさらに遠くへ吹き飛ばされる。

一方、敦平は正拳突きを繰り出した姿勢のまま、言葉を締め括る。

「蛮勇じゃ俺は討てねえよ・・・」

伽瑠羅は血反吐を吐きながらも上体を起こし敦平を睨み据えた。

なんて重い拳だ・・・昨日までの俺だったら、確実に今ので腹に風穴が空いて即出血性ショック死ものだ。だが、昨日の戦いで致命傷を受けた後、久音から・・・その・・・『洗礼』とやらを受けて俺の身体は身体能力が格段に上がり炎を操るなんて異能を発現させただけでなくかなり、丈夫にもなっているらしいな。

んでもって、昨日の致命傷が完全に塞がっていた事からも再生能力も備わっているのかも・・・ッ！

「闘いの最中に何ボケっとしてやがる？」

などと思っていたら、いつの間にか敦平が再び、伽瑠羅の真正面に移動していた。

伽瑠羅は舌打ちしながらも瞬時に後ろへ下がろうとするもその前に敦平の左手が伽瑠羅の首を掴み上げ吊るし上げられる。

「一瞬の気の緩みが戦場では命取りになる・・・そんな事も師である親から教わらなかったのか？ああんッ」

首を締め上げる力が徐々に強くなっていく。伽瑠羅はその手を振り解こうともがくが、ビクともしない。

くそ・・・昨日に引き続き余計な事に氣を取られて・・・しかし、なんて馬鹿力だ・・・意識がだんだんと遠のいていきやがる・・・ッ！

伽瑠羅は己の迂闊さを呪いながらも如何にして拘束から逃れるかを思案したが、打開策は・・・全く見いだせなかった。

「まあ、元一般人にしては結構、楽しめたぜ。我が六鳳家一門の中にもお前に敵う奴はそれこそ、俺らのような当主直系の神族くらいなものだろう。まあ、要約すりゃ今回ばかりは相手が悪かったってこった。じゃ、そう言う訳で・・・死ね」

敦平はそれだけ言うとか伽瑠羅の首を掴んでいる左腕に力を込めて一気に上空へと伽瑠羅を放り投げた。そして、放り投げた伽瑠羅目掛けて拳を構え振り上げるとそれによって拳圧―凄まじい風圧が生じ、さらにその風圧は無数の錐状へと変化し伽瑠羅の全身を貫き全身からシャワーのように大量の血が飛び出し、そのまま地上に落下しヒシャゲた様な音を立てる。それは誰が見ても致命傷以前に息絶えていると一目で分かる惨状だった。

「ああ、ぶっ壊れちゃった・・・結構、楽しめそうだと思ったんだが、正直言って拍子抜けだな。迦桜羅皇もこの程度か？」

敦平はそう肩をすくめその場を背を向けて去ろうとするが、突如として強烈な殺気を背後に感じすぐに振り返るとさっきまでグツタリとしていた伽瑠羅が立ち上がって彼を睨み据えていた。

先程の攻撃で受けた傷もみるみる治癒している。

「ハハハ・・・油断は禁物ってか？それともただ、諦めが悪いだけか？」

敦平は相変わらず余裕ある高飛車な声で呟いたが、それはどこか畏怖を感じているような響きがあった。何故なら、伽瑠羅から発せられている殺気は先程までとは別人と言って過言ではない程の圧迫感と強大な覇気をも醸し出しているからだ。

それに対し伽瑠羅は先程とは打って変わった厳かな声と口調で口を開いた。

「迦桜羅皇に仕える六鳳とも在ろう者が余に拳を向けるとは・・・これが幾星霜ぶりに降誕した皇に対するそなたら臣下の礼と言うか？」

それを聞いて敦平は小馬鹿にしたような笑いを浮かべて一蹴した。
「なんだ、なんだ。何いきなり、なりきっちゃってんの？もしかして、それで俺を退かせようって魂胆か？だとしたら随分、俺も舐めら・・・ッ！」

敦平は最後まで言う事が出来なかった。何故なら、その前に強烈な烈風が彼の身体を吹き飛ばしていたから――

「ガハッ！」

吹き飛ばされた敦平は公園内のコンクリートの塀に身体がめり込むほどに叩き付けられた。そして、今度は彼の口から大量の血反吐が出る。

「げほッ！や・・野郎・・ッ！」

敦平は眼を猛禽類のように凄めるが、それでもそれすら眼の前の怪物に比べれば霞んで見える。

伽瑠羅の両眼は金色に変わり彼の周囲には先程とは比べ物にならない凄まじい迦桜羅焰が彼を守る様に蠢いている。

「六鳳も質が落ちたものだな。このような付け焼刃で主たる余に刃向かうとは」

その言葉を敦平は挑発と受け取ったのかギリツと齒軋りする。

「不意打ち程度で調子に乗りやがって・・ッ！今度はお前が血反吐を吐けええッ！」

敦平は自身の筋力と脚力を全力で行使し光速の動きで突撃をかける・
・・が――

伽瑠羅は既に敦平の背後に移動していた。

なッ？

敦平は驚愕に眼を見開き瞬時に背後を振り返るもそれと同時に迦桜羅焰が烈風を伴って襲いかかり敦平を焼き吹き飛ばす。

「ぐがあああッ！」

敦平は迦桜羅焰に全身火達磨となりのた打ち回る。が、すぐに氣力で起き上がり自ら氣を発して焰を断つ。火達磨から解放された敦平は眼の前にいる伽瑠羅を改めて見据える。

何だ、こいつ・・・さっきまでとは別人にも程があるだろうがッ！スピードもパワーも俺を遥かに超えてやがる・・・それもこの短時間で・・・有り得ねえだろ！

おまけに・・・さっきから口調もそうだが、雰囲気までまるで、別人・・・いや、別格じゃねえかッ！

「どうした？それで終わりか、小童」

その言葉に敦平は完全に切れた。

こ・・・のオッ・・・糞餓鬼いッ！！

「先輩を掴まえて・・・小童扱いか。随分、偉くなったじゃねえかよ・・・アアアッ！！」

敦平は眼を血走らせながら先程以上・・・いや、限界以上に筋力と脚力を酷使して伽瑠羅目掛けてただし、決して猪突猛進な攻撃ではなく、寧ろ今まで以上のフット・ワークと跳躍を持って仕掛ける。

「ふむ、意外と冷静だな。しかし―」

伽瑠羅は自身の心臓がある胸に右手で触れる。すると、そこから黄金の焰が迸り、そこからこれまた、黄金の装飾が成された刀剣の柄が出現し伽瑠羅は右手でそれを鞘から抜くように引きずり出す。すると、伽瑠羅の右手には黄金色に輝く柄と鏢に鋭く長い刀身を持

った日本の神代を思わせる造りをした刀剣が握られていた。敦平はそれを見て絶句する。

「テメエ・・・ッ！そ・・・それはまさか、あめのむらくものつるぎ天叢雲剣かッ！」

「ほう、目聡いな。如何にも―これは帝より余に下賜されし宝剣・・これを持ってそなたを処断する。それが刃向かった臣に対して皇たる余が為すべき務めであろう」

そう言って伽瑠羅は構えをとる。それを受けて敦平は狂ったような笑い声を上げた。

「上等ッ！！だったら果たして見せろやッ！その務めとやらをッ！！」

そして、敦平の右拳が今まで以上の速度と威力を伴って伽瑠羅に襲い掛かる。しかし―

突如、一迅の風が静かに吹き抜けた音のみが響く。

敦平の拳は伽瑠羅には届かなかった。当の伽瑠羅はあめのむらくものつるぎ天叢雲剣を握りつつ敦平の背後を通り過ぎたように立っている。

「ば・・・馬鹿な。軌跡すら全く見えなかった・・・光速の動きを持つ神族たるこの俺が？ぐう・・・がはあああッ！！」

敦平は大量の血反吐を吐き前のめりに崩れ倒れた。その理由は明白だ。何故なら、彼の身体は胸から肩にかけて袈裟切りで切断されていたからだ。

「以後、身の程を弁えるがよい・・・哀れ者よ」

伽瑠羅は剣に付いた血を払い倒れた敦平を背に言った。

あ・・・そう言えば久音の居場所を聞き出すのを忘れたな。まあ、いいか。この辺りを適当に探すさ。

伽瑠羅はすぐにその場を後にしようとしたが・・・

「待ちなさい」

かなり、若い女・・・いや、まだ少女の声だ。伽瑠羅はその声がした方へ向くとそこにはかなり、身長が低めの少女が倒れている敦平の側に立っていた。しかも、身に付けているのは六鳳学園の制服だ。

「そなたは・・・」

伽瑠羅が相変わらず厳かな口調で問うと少女は膝をついて臣下の礼をとった。

「お初にお眼に掛かります、迦桜羅皇。私は六鳳が一家、栖鳳院家せいほういん次期当主、栖鳳院昶子せいほういんあきらこと申します。以後、お見知りおきを」

「それで余に何用か？そなたも六鳳でありながら余に牙を剥くと言うか？」

「とんでもございません。此度の事は僭越ながら貴方様のお力を見極めんが為の事」

「ふんッ、慇懃よの」

伽瑠羅は皮肉を漂わせた声で応酬する。それに対し昶子は妖しい笑みを浮かべて言った。

「お許しを・・・ですが、まだ試しは終わってはおりません。どうか今暫くここでお待ちを。敦平！」

と突如、倒れている敦平に声をかけて言った。

「如何に迦桜羅皇が相手だったとは言え、何ですか？その無様な姿は。仮にも六鳳家の一角を担う次期当主として恥を知らないッ！」

うわー、小さい身体なりの癖して結構キツイ女だな・・・おい・・・

伽瑠羅は内心でそう感想を述べた時、倒れていた敦平がピクツと動き伽瑠羅はすぐさま身構える。すると、敦平はグラつきながらもどうにか立ち上がった。袈裟切りにされた傷も再生が始まっているらしかった。

一方、昶子は辛辣な口調で言った。

「醜態ね」

「うるせー・・・チビ女がッ・・・」

敦平はそれに対し悪態をつきながら応える。そして、伽瑠羅の方を睨み据えた。

「ほう・・・まだ、懲りぬか？」

「うるせえッ！こっかからが本番だ・・・ッ。居丈高になるのも今の内だ・・・後輩ッ！」

敦平は今や先程までの余裕などかなぐり捨てて瞳孔を鋭くする。すると、瞳孔はやがてその色彩を鮮やかな赤に変化させる。いや、それだけではない。敦平の肉体全体が異様に変化して行く。

額からは二本角が生え肌は赤黒くなって行き体格も三倍ほどに膨れ

上がり、腕や手足もその様相を人から異形の物へと変わって行く。
足の方は鳥を思わせるような鉤爪へと変わり、手も鬼の様に鋭利な
爪を生やし腕にしても硬質さを感じさせる様相となって行く。

そして、背からは変色した肌と同じ赤黒い色の雄大な翼が羽ばたく。

伽瑠羅は一瞬、少しだけ眼を見開いたが、すぐに涼しい顔になって
言った。

「真の姿は現当主の許可なくば表してはならぬ掟のはず・・・それ
とも、それも六鳳家の総意か？」

『黙れッ！どの道このままでは俺の面子が保てねえ・・・いや、と
言うよりも俺自身の矜持^{プライド}が治まらねえんだよッ・・・如何に迦桜羅
皇が相手でも昨日までは単なる一般人だった奴に無様に負けました
じゃなあッ！！』

敦平は人型とは比較にもならないだろうスピードで拳を繰り出して
来る。伽瑠羅はそれをかわすが、拳圧が右頬をパツクリと切る。

そして、今度は敦平の鉤爪による蹴りが伽瑠羅の上段に振り下ろさ
れる。それは伽瑠羅の光速をも超えた速度を持ってしても回避不能
の一撃だった――

ガキイインッ！！

伽瑠羅は鉤爪を天叢雲剣で受け止める。
あめのむらくものこころ

「成程・・・己の矜持故か。仮にも六鳳の一角を率いるべき次期当
主としては間違いなく落第点ではある・・・が、悪くない。よかろ
う・・・・・・かかって来るがよい、小僧！」

九つ目の事「天叢雲劍」(後書き)

今更ながら、最初はホラーアクションのはずだったのに今や完全なバトル物に・・・何故？

しかし、そうと分かっているにもかかわらず、作者の私でも止める事ができませんので悪しからず。

とにかく、次話をお待ち下さい！

十つ目の事「再会」

異形の姿へと変貌した敦平はその身体能力と身体武器である鉤爪などを武器に伽瑠羅へ容赦のない攻撃を仕掛けて来る。伽瑠羅も天のむらくものつるぎ
叢雲剣でそれを受ける。

両者ともその動きと攻撃は常人には決して見切れぬ程の速さで繰り出している。

一方、昶子はそんな二人を楽しげに見物している。

「いやゝ、男ってどいつもこいつも何だかんだ言って好きだね……
こう言うの」

「なんて言っている場合か……」

すると、背後から別の声が聞こえ昶子が振り返ると、そこには六鳳学園の制服を着込んだ青年がいた。髪は若干、長めで左目が前髪に隠れているのが印象的な容姿だ。

「あら？ 時磨^{ときま}じゃん。なに琳鳳^{りんほう}寺家の嫡子であるあんたまで駆り出されたわけ」

先程、伽瑠羅に相対した時の大人びた口調は失せ、年相応の碎けた口調で昶子が言うとき磨は伽瑠羅と敦平の戦いを眼で追いながら話を続けた。

「それよりも……何故、敦平を止めなかった？ 如何に殺す気で試せと許可が下りているとは言え、真の姿を曝け出す事は現当主の許しがなくば六鳳最大の禁則事項だぞ」

すると、昶子は事も無げに言った。

「別にいいんじゃない？ これも試しの内だって言えば。それに、

あの馬鹿も全力を出し切らなきゃ負けなんて認められないでしょう」

「父上達だけではない・・・雅臣も何を言って来るか分からんぞ」

「まあ、あいつは予想外をとことん嫌う性分だからね・・・けどさ、それを言うなら自分が戦って見りゃいいのよ・・・あの化け物とね」

昶子はそう言って真の姿となった敦平と人の姿でありながら互角に戦う伽瑠羅を眼で追う――

『もう試しなんてまどろっこしい事は止めだッ！テメエは本気でぶっ殺すッ！！』

敦平はその言葉通りに容赦のない拳と蹴りを繰り返して来る。一方、伽瑠羅もそれを剣でさばいて行く。

この闘い、常人であれば見る事すら叶わぬだろう。何しろ、二人とも光速すら遙かに超える速さで動き互いに攻撃を繰り返しているのだから・・・

常人が見ても精々、風が静かに吹き抜けている程度にしか見えぬだろう。その代わりに二人の身体が突如、かまいたちで傷ついて行くようには見えるだろうが・・・

それくらい、二人の速さは異常だった。当然だ、光速ですら既に常軌を逸していると言えるのにそれ以上の速さなど有り得るはずがない。そのような速さがあるとすれば、それは正しく『神速』と呼ばねばならない。

『オラオラッ！どうしたッ、どうしたッ？さっきから防戦一方だぜッ！！』

その言葉と共に敦平の凄まじい蹴りが伽瑠羅の胸を少し深く抉る。

「ちッ！」

伽瑠羅は思わず舌打ちしつつも後退はせず寧ろ、一気に間合いを詰め剣を敦平目掛けてその腹部を一閃する。だが、手応えからしてそれもまた、致命傷には為り得ない。

『やってくれるじゃねえかッ！いいね・・・俺様はこう言うのを待ってたんだよッ！！』

敦平は瞬時に伽瑠羅の後ろに回り羽交い絞めにした。伽瑠羅は引き剥がそうとするが、やはり腕力や体格の差は如何ともし難い。

『ハッ！いくら迦桜羅皇でも人の姿では真の姿を現した俺様の腕力には敵わんようだな・・・このまま首を圧し折ってやるぜ・・・』
ジュルリと敦平は舌舐めずりをしつつ腕に力を入れ徐々に伽瑠羅の首を締め上げて行く。だが、伽瑠羅はふんツと鼻を鳴らして言った。

「生憎とそなた如き下朗にくれてやる程、余の首は―安くはない！」
伽瑠羅は咄嗟に天叢雲剣を敦平の足の甲に突き刺す。敦平は激痛に一瞬、首を締め上げていた腕が緩む。隙はそれで十分だった。

伽瑠羅は自分の首を絞めていた腕を振り解いた後、足に刺した天叢雲剣を引き抜きついでに右腕を斬り落としてやった。途端に大量の血が流れ、敦平は獣の咆哮を上げてその苦悶を顕わにする。

そして、伽瑠羅は次に首を狙おうと刃を一閃させるが、敦平はすぐに対処する。

『調子に乗るなッ・・・この後輩があああああああッ！！』
敦平は咆哮と共に凄まじい炎が吹き出た。伽瑠羅は瞬時に自身も迦桜羅焰によって防御壁を作り炎を防いだ。

敦平はその隙に斬り落とされた右腕を拾い元の位置にくっ付ける。

すると、一気に傷口が塞がって行く。

『はあ・・・はあ・・・いいねえ・・・本当にいいぜえ・・・!』

敦平は半ば恍惚とした表情と声で呟く。伽瑠羅はそれを聞き咎めて問う。

「何がか？」

その問いに対し敦平はさらに恍惚とした笑みを浮かべて答える。

『決まってるだろうがよ・・・この殺し合いがだよ。俺はな・・・お前も知っての通り茶道家元の跡取りだ。だからこそ、昔から堅苦しいしきたりや礼儀作法だのをガキの頃から嫌って程、叩き込まれた。何と言っても俺は宗家の一人息子だったからな。俺にだってその自覚はあったしそれも甘んじて受け入れたさ・・・だがな』

そこで敦平は眼を血走らせてこの上もなく残忍な―そして、恍惚とした笑みを浮かべてその先を続けた。

『俺が本当に求めているのはそんなじゃねえんだ・・・俺が心の底から求めてんのは血湧き肉躍る本物の戦よ。こうして、お前と血と肉を削り落とし合っている時が一番、俺は生きていると言う実感を持てる！心の底から、五臓六腑の底から愉しいと思えるッ！！いや・・・正確に言えば、愉しいと思える時はお前を動けなくしてからだな。まずはそうだ・・・この爪でお前の腸を抉る。ああ、勿論すぐには殺さねえ程度にな。次に両目を潰す。何も見えないって恐怖はこの上もないだろうな。そして、徐々に肉を少しずつ削ぎ落す・・・知ってるか？この処刑方法を古代中国では凌遲刑と言うのだそうだし、いかにも痛そうだろう？』

伽瑠羅は無表情でさらに問い質した。

「要するにそなたは殺人狂と言う事か？」

『まあ、世間一般の常識で鑑みればそうなるだろうな。親父やお袋ですら俺のこの性癖には頭をかかえていたよ。だが、そんな事はどうでもいい・・・今、俺の頭にあるのはお前を如何にして血祭りに上げてやる事だけだ―』

それだけ言々と敦平は瞬時に間合いを詰め伽瑠羅も受けて立つ。再び、互いに神速の攻撃を繰り返す。

その激闘を遠目に見ながら、昶子は時磨に言う。

「ねえ、どっちが勝つか賭けない？」

「賭けない」

時磨の返答は素っ気なかった。昶子は不満げな声を上げる。

「ちえ・・・本当にあんたも雅臣も遊び心がないんだから。やあねえ、これだから童貞って奴は」

「今はそのような話をする時ではないだろう？不謹慎だ」
時磨は少し声を荒げて窘める。

「はいはい、真面目な話をすりゃいいんでしょう？まあ、この勝負ぶっちゃけて言うけど・・・元一般人君にはかなり、キツイかもねえ」

昶子の見解が意外だったのか時磨は眼を少し見開いて尋ねた。

「先程は敦平を圧倒していたようだが、現に今も互角に剣を合わせている」

「傍目から見りゃ、そう見えるだろうけどさ・・・何れにしても元一般人君は敦平を怒らせ過ぎたわ・・・」

その言葉に時磨も頷いた。

「確かに・・・な。敦平は元より思慮とは無縁の男ではあるが、アレとて六鳳の次期当主として育ったからには我々が真の姿を人目に晒す事がどれだけ危険リスクを伴う行為であるかを理解できないはずがない・
・それを敢えて晒したと言う事はそれだけ奴が追い詰められたと言う事なのだろう」

「そして、追い詰められた獣はより凶暴となる――」

その言葉通りに敦平の動きは鋭さと共に猛る獣の如く荒々しいものとなり徐々に伽瑠羅を圧して行く。

『この元一般人風情が・・・俺様の肉体に傷をつけた罪は重てえぞッ！さつきも言ったが、お前が真の迦桜羅皇だろうとなかろうともう、構いやしねえ・・・お前は絶対に殺すと決めている。お前の命運は――』

敦平は上空へと翼を広げ飛び上がり伽瑠羅の真上を取った。そして、翼を大きく羽ばたかせてそれによって風と炎を生じさせ伽瑠羅を焼き尽くそうとする。伽瑠羅は天叢雲剣を両手でかざして防ぐ。

『この俺様の矜持プライドを土足で踏み躪った時点で尽きてんだよおおおおおおおッ！！』

その豪炎は一層激しさを増して行き伽瑠羅はその勢いでジリジリと後退して行く。

さあ！燃えカスになりやがれッ！！

敦平は勝利を確信して内心でほくそ笑んだ。しかし――

「それでも迦桜羅皇には及ばん」

時磨はキツパリと断言した。それを聞き咎めた昶子は時磨に問うた。

「そっちも随分、断言するじゃない？何の根拠があつて」

「我ら六鳳家は神族とは言え所詮は迦桜羅皇の式神・・・眷属ではない。その皇が眷属に敗れるなどと言う事があるだろうか？」

時磨がそう言う昶子は呆れたように言った。

「そりゃ普通はそう考えるけど、皇と言っても昨日、目覚めたばかりの青二才でしょ？それに引き換えあたしらは子供の頃から自身の力をコントロールする為の訓練を積んで来たのよ。その差はかなり、大きいと思うけど？」

だが、時磨は頷かない。

「だが、先程から迦桜羅皇は汗一つかいていないぞ」

「え？」

そう言われて昶子は伽瑠羅の方を見てみると確かに豪炎に圧されながらも彼自体は汗一つかいていない。いや、それ所か涼しい顔をしているではないか。

どうして・・・圧されているのよ？なのに・・・何であんな顔ができるのよッ！

昶子は信じられないと言う顔で伽瑠羅を見る。すると、その直後、伽瑠羅の姿は消えた。敦平は元より昶子や時磨も驚愕に眼を見開く。

ど・・・どこへッ？

一同の疑問には伽瑠羅が答える。

「さらに―上だ」

その言葉に敦平は自らの真上を見る。すると、自らの遙か上空には伽瑠羅が天叢雲の剣を上段に構えながら跳躍していた。

『この・・・野郎ッ!』

敦平は上空へ向けて先程の炎風を伽瑠羅に浴びせるが、伽瑠羅はそれを迦桜羅焰を持って逆に焼き尽くす。

『なッ・・・俺の炎風翼えんぷうよくを・・・ッ!?!』

敦平はギョと眼を剥くが、伽瑠羅は事も無げに言う。

「ふん、この世で最強の焰を統べる余を唯の火で制しようとは・・・笑わせる」

その言葉が余程、屈辱的だったのか敦平は齒軋りして激昂する。

『俺の炎風翼が・・・唯の火・・・だと?随分とご高説じゃねえかッ!迦桜羅皇さまよおおッ!!なら、受けて見ろや。俺様の本氣って奴をッ!』

敦平は両手を組んで大きな拳を作り、伽瑠羅目掛けて構える。すると、その両拳に炎と風が集まる。

「敦平の奴、住宅街もあるこの場所であれを使う気かッ!」

時磨は怖気が走った様に顔が引き攣る。昶子も呆れたように呟く。

「うわー、完全にぶち切れちゃっているよ・・・アレ」

『喰らえ・・・鳳天炎風掌ほうてんえんぷうしょうッ!!』

巨大な炎風の拳が物凄い速度で伽瑠羅に迫る。しかし、それでも尚、

伽瑠羅は怯んだ様子はなく唯、剣を振り下ろした――

天叢雲剣は迦桜羅焰を刀身に纏わせながら、迫りくる炎風の拳をバターの様に易々と真つ二つに切り裂いた。二つに切断された炎風の拳は形を失くし四散して徐々に消えていく。

敦平は自身の最高の技が破られたのが余程、信じられぬのか呆けたような顔で呆然と自らに刃を届かせようと迫り来る伽瑠羅を攻撃するでもなく、かと言って防御するでもなく、唯……見つめていた。

どうした？早く、動けよ俺。相手は攻撃を仕掛けて来てるんだぞ？動けよ。攻撃でも防御でもさっさとしろ。

だが……何故だ？もう……何も……する気になれない。どう言う訳だ？闘いはまだ、終わっちゃいねえだろ？何なんだよ、この気持ちはッ！

ああ……そうか。これが……生まれて初めて……敗北を悟るって事なのか。

敦平がそう思った時、その時は来た。

まず、右腕が斬り飛ばされた。次に左腕、さらに右足と左足……そして、お次は背中中の両翼。それらは無論、全てが神速。それは正確な時間に置き換えると0.1秒にすら満たない時間だった。一瞬の間を空けて全ての傷口から夥しい血しぶきが上がる。当然の事ながら、両翼を失った敦平は上空から真つ逆さまに地上へと落下して行く。

伽瑠羅はそれをさらに追い自らも地上へと下りる際に最早、芋虫同然の身体となった敦平の残っている唯一の部位――即ち“首”を最後に斬り落とした。それもまた、0.1秒に満たない時間での出来事であった。

伽瑠羅が地上へと着地するのと同時に敦平の残骸も鮮血と共に落下

した。

その光景を見ていた昶子は開いた口が塞がらないと言う顔で呟く。

「うっ・・・そ・・・本^{マジ}気でッ？」

それに引き換え時磨は冷静だった。

やはり、彼が・・・いや、このお方が迦桜羅皇――

時磨がそう確信しかけた時、伽瑠羅は今度は二人に剣を向ける。

「いつの間にか六鳳の小童がもう一人、増えたようだな・・・今度は二人掛かりで余に刃を向けようと言う腹か？」

それに対し時磨が膝を折って臣下の礼をとり答えた。

「とんでも御座いませぬ。此度の事は僭越ながらも貴方が我らの真の皇で在らせられるかを見極めんが為の事。決して、叛意あつての事では御座いませぬ」

「そのような事はどうでもよい。そもそも、余がここへ参つたは天照を返して貰う為だ。天照・・・いや、久音は何処におるか！」

伽瑠羅は天叢雲剣を時磨の首筋に当てて威圧を込めた声で問い質す。

「僕はここだ。剣を退け、伽瑠羅」

突如、声がした方を見るとそこには久音の相も変わらず悠然とした姿が立っていた。伽瑠羅はそれを見ると金色に輝いていた両眼が元の黒色へと戻り口を開いた。

「久音・・・良かった・・・ぶ・・・じい・・・で・・・」

それだけ言うと伽瑠羅は緊張の糸が切れたようにその場へ倒れ込んだ。それと同時に右手に握っていた天叢雲剣も伽瑠羅の身体に吸い

込まれるようにして消えた。

「伽瑠羅ッ！」

久音はすぐに伽瑠羅の下へ駆け寄り彼を抱き起こす。

相変わらず・・無茶をする。恐らくは今回も昨日と同じ様に迦桜羅皇の力を無意識にだろうが、強引に引き出したのだろう・・しかも、今回の相手は昨日のような『劣化品』ではなく六鳳家直系の神族だ。相当の無理をしたに違いない・・・自分などの為に・・・ッ！

久音は伽瑠羅をギュッと伽瑠羅を抱き締めた後、昶子と時磨を睨み付けて言った。

「北鳳院ほくほういんからの伝言だ。此度の試しは終了。速やかに六鳳家本邸へ戻れとね」

その言葉に昶子は頬を膨らませつつも了承する。

「はいはい、分かりましたよ。そりゃ、敦平もスプラッタになっちゃったわけだし・・・これ以上は路傍の石なのは明らかだしね」

「承知いたしました。どうぞ、獅桜鳳校長しおうたかにはご随意にお伝え下さい」

時磨は昶子とは違い丁寧な口調で言った。

そして、最後に久音は二人に言った。

「それから、もう一つ北鳳院や六鳳の現当主達に伝えてくれたまえ」

「何を・・で御座いましょう？」

時磨が白々しくもそう聞くと久音は一層、苛立った声で言った。

「不満があるのなら、このような回りくどい事はせず堂々と正面から言いたまえッ！……と伝えて欲しい」

「……承知致しました」

そう口にするの時磨と昶子は敦平の残骸を袋に詰めて瞬く間にその場を去った。

そして、後に残された久音は伽瑠羅の右手を肩に乗せて身体を支えると呟くような声で聞こえるはずもない彼に対して言った。

「頼むから……余り……無茶な事はしないでくれたまえよ」

この日……それぞれの事が大きく動き出した。明日からはもう……昨日や今日と同じ様な明日を迎える日は……きつと、来ない。

十つ目の事「再会」(後書き)

一先ず、物語としては序章が一段落と言った感じです。次話からは中盤へと移行する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3506w/>

鬼の笑み－鵜

2011年11月13日22時58分発行